龍谷
Ryukoku

龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

2014 No.78

龍谷 2014 No.78

Ryukoku Magazine 78 2014 September

CONTENTS

01 P01
Feature Article 巻頭特集 学長対談
文化と文化、心と科学
領域を越え、手をつなごう
ロバート キャンベル さん × **赤松 徹眞** 学長

02 P06
5 長 News
深草キャンパス・瀬田キャンパス施設整備
社会貢献事業報告

03 P08
People, Unlimited
ミャンマーでつかんだ、未来への決意
大橋 紗奈 さん 理工学部

P10
People, Unlimited
アルティメット、世界ジュニアで 7 位
山口 瞳 さん、**中路 友佳子** さん 社会学部

P12
People, Unlimited
弁当づくりから「食」を学ぶ“弁当塾”
吉田 恵太 さん 法学部

04 P14
Education, Unlimited
「食」と「農」を五感で学ぶ
持続可能な社会づくりを担う人材育成
末原 達郎 教授 農学部※学部長就任予定

P18
Education, Unlimited
文化の違いを理解することが、国際社会で活躍できるコミュニケーション能力を育む
瀧本 眞人 教授 国際文化学部

P22
Education, Unlimited
地域社会のエネルギー問題を変える
「龍谷ソーラーパーク」
深尾 昌峰 准教授 政策学部

05 P26
World, Unlimited
グローカルな視点が地方都市を変える
政策学部：ドルトムント工科大学との協働学習プロジェクト

06 P30
Ryukoku Event
蘇れ、一世紀前のこころざし
和田 秀寿 龍谷ミュージアム学芸員

P32
Ryukoku Event
トークセッション
フォーラム、シンポジウム予告

07 P34
News & Topics
最新情報

08 P40
People, Unlimited 龍谷人
天王寺雅楽とともに
生きた道
小野 功龍 さん 願泉寺住職、天王寺楽所雅亮会楽頭

P42
People, Unlimited 龍谷人
淡路島の起爆剤
27 歳の市議
木戸 隆一郎 さん 洲本市議会議員

P44
People, Unlimited 龍谷人
今日からはじめられる、
「夢を実現する方法」教えます
麻丘 亜希 さん ウエディングエプロンデザイナー

09 P46
Book Cafe
新刊紹介

※農学部（2015 年 4 月開設予定・設置認可申請中）

01 | Feature Article

巻頭特集 学長対談

文化と文化、心と科学 領域を越え、手をつなごう

東京大学大学院教授
ロバート キャンベル
×
龍谷大学学長
赤松 徹眞

撮影協力：京懐石 柿傳

本学は、2015年4月に「農学部（設置認可申請中）」の新設と、国際文化学部を深草キャンパスに移転・改組し「国際学部」の開設を予定している。2013年12月に大阪で開催したグローバルシンポジウム、「『多文化共生』とグローバル社会に求められる学びとは」（読売新聞大阪本社共催）では、日本近世文学の専門家であり、落ち着いた物腰と本質を突く発言でコメンテーターとして人気の、東京大学大学院教授ロバート キャンベル氏に基調講演をいただいた。

今回は本誌のために、日本文化の特質を問い続けるキャンベル氏と赤松学長が、日本らしい「農」と「食」の探求のあり方や、グローバルに活躍する人材育成の課題について語り合った。

多文化共生でこそ
日本文化の底力を知れる

赤松　キャンベル先生はアメリカから日本にいらして、江戸、近世文学を専門に研究されていますが、日本文化に興味を持たれたきっかけは何だったのでしょうか。

キャンベル　小さい頃から読書、フランス語などの外国語の勉強、映画やファッションなどの視覚的な文化に惹かれていました。心のあり方への探求は、人によって、哲学や宗教などに陶冶されると思いますが、私の場合は、視覚的なもの・・・形や色の表現、時による変化などから、人間として逃れられない喜怒哀楽や文化的な違いを見いだすことに興味があったのです。そして10代の後半で、決定的な瞬間はないのですが、フランス語や他のインドヨーロッパ系の言語とは異なる「日本語」という、もう一つのフロンティアとの出会いがありました。日本は視覚芸術が優れていて歴史も長く、西洋のモダニズムの基礎に日本の美学の要素があることも知っていました。それから文学が非常に面白いと感じました。翻訳から入り、日本語を学んでからは原文で読むようになりました。日本独特の美学に関心を持ったのです。

赤松　長く日本にいらっしゃいますが、「日本の伝統文化」という概念についてのお考えをお聞きしてみたいですね。私の専門は仏教史ですが、その立場から見ると、日本文化は必ずしも全体をひとくくりで説明できるものではないと思います。例えば仏教も古代、朝鮮半島を通って伝来したルートもあれば、中国のほうからも来たりしていました。昔から日本は、周辺国から技術や文化を取り入れて、モデルチェンジしながら、より交流を広げようとしてきました。多文化共生ですね。伝統を守ろうとして新しいものや異なるものを排除するのは、少し違うかなと。日本ならではのものはコレ、と違いを強調するのではなくて、周辺地域までもう少し俯瞰して理解をしていったほうが好ましいのではと思うのです。

キャンベル　まったく同感で、日本人は、他と違うことを一つひとつ棚卸しをして塗り込めていくよりも、ゆるやかにつながっているという考え方を持つことが大切ですね。もう少し視点を引いて、歴史的経緯や、海に囲まれている地理的な状況をとらえたいですね。島国ではありますが周りは最高の潮流に囲われ、海道が世界中につながっている。非常にさかんな人物交流があって、世界中から、モノや、仏教のような精神文化をもらった。そして実は逆に優れたセンスを世界と共有できる環境にありますよね。日本の本当の底力であったり、怒濤の近現代を生き抜いて、なお今もあるものは何か、ということを考える上でも、world historyのなかの動きとして、俯瞰して見てみる視点がものすごく大事だと思うんですね。

日本の「農」と「食」は、
世界に発信する価値がある

赤松　日本の食も世界中から刺激を受けて発展してきました。和食はユネスコの無形文化遺産に登録され、盛り上がっていますね。しかし一方で、加工技術の進化や流通の影響で均一化も進み、安全が脅かされている面もあるなと。「食」さらに「農」を考えることは文化を考えることにもなりますね。

キャンベル　世界で様々な流れがあって、独自の言語や食文化との断絶のある国も多いなかで、日本は自国の言語と食を保っています。さらに今では、特に東京は、世界中の多様な食があつまる特異な空間です。昔から、災害対策のための備蓄文化や、「もったいない」の思想、炊き出しというコミュニティ活動、お米経済や食物の贈与習慣、祈りの場での供物としての食物など、食を抜きにして日本文化は語れませんし、江戸時代の俳句もほとんど食無しには作れません。食が精神文化の礎を築いたと言っても過言ではないでしょう。おっしゃるように、食の均一化に問題意識も感じず、食品の製造過程も考えずに生きるということは、今まで日本がつくってきた文化的なメリットを放棄することになると思います。

赤松　本学の農学部の新設も、多くの現代人の関心があり、人間の一番の生存のもとである「農」と「食」、そこをもう一度見直してみようという意図があります。世界的には飢饉はまだまだ各地で起こっています。そんななかで「農」と「食」、「日本の歴史」をふまえながら、学部をつくったらどうなるのだろう、と。人間の営みのなかで、自然に対する働きかけをして、収穫する。得たものを、エネルギーとして吸収する。それを超えた深いところで、いのちを支える、いただくものとして考えていく。浄土真宗の精神を建学の精神に掲げる大学として、全てのいのちを大切にする「平等」の心や、生かされていることへの「感謝」の心を育むためにも、「農」と「食」を今この時代に打ち出していくことに、大きな意味があると思っています。

ロバート キャンベル（東京大学大学院教授）1957 年ニューヨーク市生まれ。カリフォルニア大学バークレー校卒業（B.A. 1981 年）。ハーバード大学大学院東アジア言語文化学科博士課程修了、文学博士（M.A. 1984, Ph.D. 1992 年）。1985 年に九州大学文学部研究生として来日。同学部専任講師（1987 年、国語国文学研究室）、国立・国文学研究資料館助教授（1995 年）を経て、2000 年に東京大学大学院総合文化研究科助教授に就任（比較文学比較文化コース〔大学院〕、学際日本文化論〔教養学部後期課程〕、国文・漢文学部会（同学部前期課程）担当）。2007 年から現職。

キャンベル　食の倫理と言ってもいいと思います。最近アメリカでは、「フードディフェンス」といって、流通や製造処理現場への計画的なテロ攻撃に対してどうするかが大きな関心事で、いろんな動きがあります。しかし日本では、もともと農民一揆のように食を奪って再配分させることはあっても、食物を傷つけたり、破壊したりするのは、考えにくいことですよね。

日本の食に対する心性と、グローバリズムな時代のなかで食が置かれている状況。結構そこに、世界に発信していくべき役立つ要素があるんじゃないかなと思うんですね。私はぜひ、この文と理が融合した、域を超えた研究と実践を、龍谷大学の新しい農学部の理念と実践に期待したいですね。アメリカではできないことです。食の倫理学はできても、実際の生産や流通の学びとドッキングした形で、それが生産、流通、栄養学をどう変えていくか、なかなか同じ土俵で語られるということがないんです。龍谷大学のような場所でこそ、むしろそれが自然にできる。新しいイノベーションの土壌がそこにあるんじゃないかなと期待しています。

赤松　ぜひ、期待に応えられるようにしたいと思います。

語学力はゴールではない、それで何をしたいのか

赤松　グローバル社会のなかで活躍できる人間の育成が日本の大学の急務ですが、キャンベル先生は、どういった人間像が理想と思われますか。

キャンベル　月並みですけれども、外国語の習得は大切だと思います。まず英語について、頭で考える前に口から言葉が出てくるぐらいに、リアルタイムでわたり合っていけるスキルを身につけることが大事です。ただ言葉は、木材を前にした工具のようなもので、それを使って、どういう木材を、どういう設計図にしたがって、どういう建物を建てるのか、ということがないと、それは活きないわけですから。外国語ができるだけで自分が国際人材だと勘違いしないでほしいですね。その外国語を使ってどんなことに挑むのかを考え、その分野について掘り下げていくべきです。どのような組織に行っても、職場が変わっても、「腕に覚えあり」といわれるぐらいの自分のスキルを身につけることです。

赤松　本学は農学部設置と同時期に、これまで瀬田キャンパスにあった国際文化学部を国際学部と改組し、京都市内の深草キャンパスに移し、新たに120名定員のグローバルスタディーズ学科を設置してモデルチェンジしようとしています。そこでは半年～1年の留学を必修化し、講義も8割以上を英語または英語と日本語併用の講義にして、在学生、留学生間の交流もシステム化していく予定です。異文化は英語ばかりではありませんが、現在、国際社会に飛び立とうと思えば、まず必要なのは英語のコミュニケーション能力です。グローバルスタディーズ学科では、その一点を確実に押さえた上で、複合的な知識と思考を育てる「グローバルな教養教育」を展開したいと考えています。キャンベル先生の母校でもあるカリフォルニア大学バークレー校とも連携しています。

キャンベル　それはいいですね。バークレー校は農に力を入れているので、とてもいい連携になると思いますよ。

日本の大学教育を発展させるのは、文理間の壁の突破

赤松　激動する日本社会では、大学教育の質的な向上が叫ばれていますが、大学教員でもあるキャンベル先生は今後の日本の大学教育のあり方について、どのようにお考えですか。

キャンベル　一つは、まさに龍谷大学がめざされているように、大学の一角に風穴をあけ、海を越えて学生の循環をつくることですね。その周囲までも目に見えて心のキャパシティが広がり、語学スキルアップのスピードもあがります。次に、広い教養を身につけられるようにすると同時に、そのなかで、足場となる専門をつくることが重要です。そして同時に、一つの分野のなかに閉じこもるのではなく、歴史、社会学、経済学、様々な領域を横断できるシステム、俯瞰的に見られるような見晴らし、それを大学のいたる所につくるべきだと思いますね。先ほど文と理を合わせた農学部の話が出ましたが、私はそれができればすごくいいと思います。例えば経済と医学、言語文化と心理学、生命科学と建築。それらのシナプスを学生自身が発見できるような仕掛けを、カリキュラムや制度などで設け、道を可視化することが、日本の大学に求められていると思います。

赤松　教員も、研究室で一国一城の主となりがちですが、社会に開く知の創造者として、これまでのあり方を見直さなくてはなりませんね。

キャンベル　さらに、それを学生達に通じる言葉にしていくこと、思考を刺激できるかたちでアウトプットしていく方法論を身につける必要がありますね。学生がその本当の魅力にたどり着くまで、段階を踏んで興味深いかたちで伝える工夫の重要性を感じます。

赤松　学生にも単なる講義時における先生との接点だけでなく、プライベートな場面での先生への関心を持って接してほしいと常々言っています。そうすることで、出会いも広がり、テキストではないかたちで学ぶものがあると。一方、本学も第5次長期計画という改革のなかで、教養教育のあり方の見直しや教職員の教育支援体制の充実をはかっているところです。グループ討論やワークショップなどにレイアウト自在の多機能教室などを整備していますが、それらをまさにキャンベル先生のおっしゃるような挑戦に役立てていきたいと思います。

赤松 徹眞　あかまつ てっしん（龍谷大学学長）1949年奈良県宇陀市生まれ。龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了、龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。（文学修士）1984年龍谷大学文学部講師、1987年龍谷大学文学部助教授、1998年龍谷大学文学部教授、2005年龍谷大学教学部長、2007年龍谷大学文学部長、2011年4月学長に就任、現在に至る。専門は日本仏教史、真宗史、近代史。

02 | Ryukoku 5長 News

国際文化学部の移転・改組による「国際学部」の設置と「農学部（設置認可申請中）」の新設は、5長を代表する事業である。これら2学部は、いずれも2015年4月の開設を予定しているが、最高の学修環境を提供するために、現在急ピッチで関連施設の整備が進められている。

深草キャンパス新１号館

「グローバルコモンズ」及び「自律型言語学習支援施設」を設置

2015年4月の国際学部設置により、ますます国際化する深草キャンパス。多文化共生キャンパスの新たな顔として新1号館（仮称）が、現在完成に向けて建設中だ。その新1号館には「龍谷大学ラーニングコモンズ」の一環として「グローバルコモンズ」及び「自律型言語学習支援施設」が設置される。

グローバルコモンズのコンセプトは、「外国人留学生を含む多様な学生が集う、マルチカルチャー、マルチリンガルな活気に満ちた学びの空間」「龍谷大学の『国際化』を推進するプラットフォームとしての空間」。常に日本人学生と外国人留学生が異文化交流できる環境をつくりだし、国際交流に少しでも興味を持つ学生が、気軽に参加し交流できるスペースをめざす。

さらに、語学力を高めるための「自律型言語学習支援施設」を整備し、留学が決定した学生はもちろん、これから留学をめざす学生、語学力を向上させたい学生のための自習施設を充実させる。

深草キャンパス新１号館

キャンパスの中心となる南側に、図書館を配置

新1号館の建設に合わせて、7号館（図書館旧館）機能を発展的に移転し、国際学部の設置に向けて、図書、雑誌等資料の増加に対応する。また、既存の8号館と連結して機能連係を図り、閲覧スペース、書庫スペース等の充実を図るとともに、図書館の電子化や多様化が進む学内外資料のアーカイブ化を視野に入れ、機能的かつ快適な環境の整備に努める。

瀬田キャンパス

先端研究を支える最新の実験機器を備えた農学部新棟を設置

国際学部設置と同じく、2015年4月、瀬田キャンパスでは、農学部の拠点となる新棟の建築が進んでいる。

その「農学部新棟」には、先端研究を支える最新の実験機器が完備される。「農学部新棟」には、人工気象機を約30台設置する国内最大規模の「植物培養室」を整備し、自然環境を再現した条件下で、多数の実験植物の栽培が可能となる。最新機器を用いてヒトの代謝や体組成の測定等をおこなう「ヒト代謝実験室」は、食べ物がヒトの身体に及ぼす影響を最新の体脂肪測定装置を使って測定するなど、食べ物とヒトの関係を様々なアプローチによって解明することができる。

さらに、新棟の屋外には果樹園が設けられ、四季を通じて様々な草花や果実が農学部新棟を囲む。温室も設置され、年間を通じて農作物の栽培が可能になる。これらの果樹は学生達の実習を通じて管理・栽培される。

また瀬田キャンパス近隣に約2ヘクタール規模の実習用農地を借用し、農場作業所も併設する。学生はこれら最先端の設備と緑豊かで多様な植物に囲まれる充実した学修環境のなかで、「食の循環」をテーマに、日本と世界の農業を学んでいく。

農学部（2015年4月開設予定・設置認可申請中）

「5長」とは龍谷大学が現在推進している「第5次長期計画」の略称です。5長は2010年から2019年までの10年間にわたる経営計画で、2020年の龍谷大学像を「世界で躍動する大学」「自立的・主体的な学生を育成する大学」「多文化共生を展開する大学」と定めています。現在、これを実現するために、教育、研究、社会貢献、大学運営、財政の五つの観点で、約50の具体的なアクションプランを策定し改革を実行中です。

5長では「社会貢献」も重要なテーマとして掲げており、多様な事業を展開している。特に本学が立地する京都・滋賀においては、地域に根ざした社会貢献活動を積極的に展開している。

「社会連携推進会議」を設置、「社会連携・社会貢献活動報告会2014」を開催

今年4月には、学内の社会連携・社会貢献を推進する部署で組織する「社会連携推進会議」を設置し、7月9日に会議が主催する初回の「社会連携・社会貢献活動報告会2014」を開催した。

報告会では、基調講演で京都市から本学に対する期待が述べられた後、実績のある学内団体の活動 3例が報告された。そこで報告された活動のなかから、特徴的な事例を紹介する。

事例1「京都マラソン × 龍大スポマネ lab.× 京念珠〜KYO『TO』HOKU〜」

スポーツサイエンスコースのスポーツマネジメント研究室ゼミ学生が中心となるプロジェクトチーム「京都マラソン×龍大スポマネlab.×京念珠〜KYO「TO」HOKU〜」が、「京都マラソン2014 東日本大震災支援事業」への寄付を目的に、一つひとつ手作りした念珠ブレスレットを販売した。

事例2　深草町家キャンパスを活用した、「町家シネマ」の開催

京都市の「2014年度学まちコラボ事業」(※)に採択され、助成金を受けて取り組んでいる事業の一つ。松浦さと子ゼミ(政策学部)が月に一度、龍谷大学深草町家キャンパスで地域住民からお借りした昭和40年代の8ミリフィルムなどの上映会を開催している。

※学まちコラボ事業:魅力ある地域づくりや地域の課題解決に向けて、大学と地域との連携による取り組みに支援金を交付する事業。

社会連携推進室　深草キャンパス9号館（学友会館）に開設（深草町家キャンパスに関する業務もおこないます）

今年4月に設置した「社会連携推進会議」では、次の事柄について検討を進めることとなっている。

①社会連携・社会貢献を推進する組織間の情報共有に関すること
②社会連携・社会貢献推進に関わる取り組みの学内外への情報受発信に関すること
③社会連携・社会貢献活動の支援に関すること
④その他, 社会連携・社会貢献の推進に関すること

これに伴い、所管の窓口として「社会連携推進室」を開設。学内外のニーズとシーズに関する情報収集、情報発信、マッチングなどをおこなう。これを機に、これまで以上に、地域住民や自治体、地元企業等と大学の連携強化を図りたい。

TEL:075-645-5629
E-mail:rec-k@ad.ryukoku.ac.jp
◆開室日：月〜金曜日（土日祝日及び大学の夏期・冬期休業期間を除く）
◆開室時間：12 時 30 分〜 17 時 00 分

03 | People, Unlimited

ミャンマーでつかんだ、未来への決意

大橋　紗奈さん
理工学部
環境ソリューション工学科3年生

昨年、アウン・サン・スー・チー氏が来学されたことを機に、本学とミャンマーを結ぶ様々な交流がスタートした。その一つが、「海外友好セミナーinミャンマー」である。この変わりゆく国の現状をなんとか学生達に、その目で見てほしい。それは必ず今しかできない希有な学びになるはず。そんな願いをこめた、7泊9日の旅程は、現地学生との交流や日系企業への訪問、農村見学、仏教遺跡群の観光までを含むなんとも充実したものとなった。選考を経て選ばれた30名の学生達は、事前学習で歴史や政情をしっかりと学び、2014年2月12日ミャンマーへと旅立った。学生達はこの旅で何を思い、何を見つけたのか。セミナーへの参加が、人生の転機となったという理工学部の大橋さんにお話を伺った。

1年前の春、私は瀬田キャンパスのライブ中継でアウン・サン・スー・チーさんの講演会を聴いていました。そこでスー・チーさんが、「学生時代には何かに挑戦することが大事」と仰ったことがずっと胸に残っていました。その後、大学に入ってから漫然とした日々を送っている自分に焦りを感じはじめていた時に、友人にこのセミナーのことを聞いたのです。スー・チーさんの言葉が甦り、「これも何かの縁かも」と説明会に参加してみたら、どうしようもなく参加してみたくなってしまったのです。思いはあってもなかなか行動できない、そんな自分をこの旅で変えよう、私はそう決意しました。

ミャンマーでの9日間は、一生忘れられないものになりました。現地の学生との交流では、夢のために着実に努力しているミャンマー学生の姿に感銘を受けました。日本人向けの旅行ガイドになりたいという子は毎日語学を8時間も勉強していて、流暢に日本語を話していました。すごいなと思う反面、自分もがんばらなくちゃと、いてもたってもいられない気持ちになりました。また、みんな英語がとても上手で、同じ大学生として恥ずかしかったです。でも、学生達と1時間近くディスカッションをしたのですが、これが意外と盛り上がったんですよ。きちんとした英語が話せなくても、ジェスチャーでも伝えたいという気持ちが何より大切なんだって、身をもって知りました。心が通じた！と思えた瞬間の、鳥肌が立つほどの嬉しさを忘れずにいたいと思います。また、一緒に参加した龍大のメンバーや引率した職員さん達も、驚くほど積極的な人が多くて、たくさんの刺激を受けました。彼らのおかげで旅の前半では少し気後れしていた私も、「後悔して帰るのだ

けは嫌だ」と、どんどん積極的になることができました。

なかでも、私にとって最も印象的だったのは、ヤンゴン郊外の農村へ訪れたときのこと。そこでは自給自足の生活が営まれ、人々は温厚でとても長閑なところでした。しかし、牧歌的な風景のなかにペットボトルやプラスチックごみといった近代的な産物が散乱していたのです。私は、その光景になんだかとても違和感を覚えました。ミャンマーの観光大臣の講演で、経済発展がものすごいスピードで進むなか、モノとカネはどんどん流入してくるけれど、肝心のヒトが足りないと聞きました。知識を身につけた人が不足しているがために、こんなことになってしまうのか、と唖然としました。その時、私は自分の将来の目標が見えたのです。私は、環境ソリューションを学んでいますが、その力を将来、発展途上国の環境保全のために使いたい。これからそのために学んでいこうと強く思いました。

帰国して、私は自分のなかに一つの哲学をもちました。行動が現実をつくる、というものです。考えているだけ、思っているだけではだめ。まず一歩を踏み出せば、世界は変わるんだ。この旅で私はそう確信することができました。私はいま、8月にグローバルキャリア実践実習（※1）でアメリカへ行くために英語を猛勉強中です。また龍起業塾（※2）へも通いはじめました。どれもミャンマーでつかんだ夢の実現へとつながっていると信じています。いつかあの美しい国に、自分を見つけさせてくれた恩返しがしたい。いま、私はやっと大学生になれたと胸を張っていえる気がします。

大橋 紗奈さん

※1）グローバルキャリア実践実習
カリフォルニア州にある龍谷大学の海外拠点を活用した、現地の日系企業での実習。
※2）龍起業塾
起業やビジネスに関する多様な知識を学び、起業家精神をもったビジネスリーダーをめざすプログラム。

03 | People, Unlimited

アルティメット、世界ジュニアで7位

山口　瞳さん

中路　友佳子さん

社会学部２年生

「アルティメット」という競技名を、初めて聞いた方もおられるだろう。『究極』を意味するこのスポーツは、芝生のコートでフライングディスク（いわゆるフリスビー）を使っておこなう7人制の団体競技だ。ルールはディスクを投げ、パスをつなげて相手チームのエンドゾーン内でキャッチすると点が入るというもの。バスケとアメフトを足したような、というとイメージしやすいだろうか。走る・投げる・跳ぶという複合的な運動要素に加え、パスワーク・フォーメーションといった頭脳戦術も要求される、文字通り究極の競技である。また、空中で繰り広げる攻防戦などアクロバティックな要素もあり、観戦するのも楽しい。欧米を中心に人気があり、日本でも着実に競技人口は増加中。オリンピック正式種目化への期待も高い、いま注目のスポーツである。

本学にも2004年にアルティメット・サークル『ROC-A-AIR（ロッカエア）』が誕生。世界チャンピオンに輝いた経験を持つ久保和之監督のもとで日々練習に励んでいるが、このたび嬉しいニュースが舞い込んできた。アルティメット競技歴わずか1年の山口瞳さん、中路友佳子さんが、この夏イタリアでおこなわれた世界ジュニア選手権大会に出場し、ベスト7の快挙をあげたのだ。さっそく帰国直後の二人に取材した。

ー代表選手にはどのようにして決まったのですか

山口　今年に入ってから数回、静岡で選考を兼ねたナショナルチームの練習会がおこなわれました。私も中路さんも大学からアルティメットをはじめたので、代表をめざすというよりも、いろんな人と練習するなかで力をつけたいと参加してきました。そして5月の最終選考会で代表の22名に入ることができました。

中路　ジュニア選手権は19歳までなので、出場できるのは大学1年生の早生まれまで。競争率としては少し得ですね。全国から集まった選手達は、みんな上手いし意識も高くて、すぐに仲良くなりました。まとまりのある良いチームで、とにかく練習が楽しかったです。

ーお二人のポジションは

中路　アルティメットにはディスクを回す役目のハンドラー、中盤でつなぐ役目のミドル、主にレシーバーとなり点を取る役目のディープの三つのポジションがあって、私はディープです。背が高い人がなることが多いポジションです。

山口　私はハンドラー。ゲーム展開をつくる役目です。ディスクを受け取って、次にどこに投げるか、瞬間的な判断力や俊敏性、コントロール力が求められるポジションです。

ー世界ジュニアでは19の参加国のうち7位という成績でしたが、結果はどう受け止めていますか

山口　金メダルを狙っていたので、正直ものすごく悔しいです。1次予選でフランス・アメリカ・イスラエル・オランダと、2次予選でフィンランド・ドイツ・オーストリア、最後にカナダ・イタリアと対戦しました。発祥国のアメリカをはじめ欧米のチームは、競技歴の長い選手が多くてレベルが段違い。体も大きいし、走るのも早くてフィジカル面でも圧倒的な差を見せつけられました。でも外国の人とプレーをするのは初めてで、めちゃくちゃ楽しかったです。いろんな国の人が声援を送ってくれるのも嬉しかったですね。

中路　一番印象深い試合は、最後に対戦したイタリア。5位を巡って戦ったのですが、接戦の末に12:14で負けてしまいました。実力的には絶対に勝てる試合だったので悔しいです。でも、この試合で私と山口さんの龍大コンビで2点取ったんですよ！山口さんがロングスローを投げてきた時、これは絶対取らなきゃ！って思いました。

山口　私はいつも予測できないところに投げるみたいなんです（笑）。でも中路さんはそのタイミングをわかってくれる。イタリア戦で私のロングを中路さんがキャッチして決めた時、めっちゃ嬉しかったですね。忘れられない思い出です。

ー今後の目標は

中路　次は2016年開催の、U-23大会の代表選手入りをめざします。今回よりも狭き門になるのでがんばって練習しないと。

山口　世界ジュニアでは世界の壁を感じたけど、自信を持って思いっきりプレーすることができました。このモチベーションを維持して、上をめざしてがんばります。

山口 瞳さん（背番号23）
中路 友佳子さん（背番号21）

03 | People, Unlimited

弁当づくりから「食」を学ぶ“弁当塾”

吉田　恵太さん
法学部4年生

深草キャンパスの一角に、輪になって持ち寄った弁当を分け合いながら食べている学生達の一団を発見した。彼らは“弁当塾”のメンバーだという。“塾”とつくからには、ただ弁当を食べているわけではないようだ。2001年に香川県ではじまり、全国の大学や小中学校にも広がる「弁当の日」という取り組みを、“弁当塾”として龍大に取り入れたのが吉田恵太さん。献立から買い出し・料理・弁当詰めまでを全て自分でおこなうことで、「食」を考えるきっかけをつくるという食育活動だそうだ。吉田さんに経緯や目的を伺った。

きっかけは昨年参加した「議員インターンシップ」です。僕は大阪の泉大津市議会議員の方のもとでインターンをしていたのですが、そこで「弁当の日」についての本を読んだのです。そのなかで、ある大学生が「自分で弁当をつくることで、両親への感謝に気づき、食を通して生きていく力を身につけたい」と書いていたのが、とても心に刺さってしまって。ちょうど僕も親に何も感謝を表せていないな、と思っていたところだったんですよね。それで翌日さっそく弁当をつくってみたのです。僕はずっと実家暮らしで、料理は全くしたことがありませんでしたから、母親はものすごく驚いていましたね。でも僕がFacebookに、“「感謝」と「自立」”を目的に弁当づくりを始めます、と書いた記事をなぜか母も読んだらしく、LINEで「応援してるよ」ってメッセージがきました（笑）。「おかんなんで見てんねん」とツッコミつつ嬉しかったですね。それから週に2回、大学に行く日は必ず自分で弁当をつくり、一人で「弁当の日」を始めました。早起きして弁当をつくるって本当に大変なんだな、と知ると同時に、今まで弁当を作ってくれた母親への感謝を感じずにいられませんでした。また、手づくりするようになってから、「コンビニ弁当やファーストフードばかりを自分の子どもには食べさせたくないな」と思うようになりました。

「食」って生きる上でとても重要なこと。僕達は、その知識や経験を親になる前に身につけるべきではないかと思うんです。そんなことを考えはじめた頃、ちょうど、同じ法学部の友人である野崎潤くんや奥村祥太くんも僕の「弁当の日」に興味を持ってくれたことから、活動を組織化することにしました。スタートするまでの4カ月間、三人で活動目的や運営方法を何度も議論しました。そうして立ち上げた“弁当塾”では、FacebookやTwitterで学生を集め、その日のテーマにあわせて一人一品を人数分つくってくることにしました。テーマは“初デートで持って行きたい一品”“五月病をふっとばす一品”など参加者のやる気の出るもの

を設定。また、いただきますの前に「食」を考えるきっかけになる小話を毎回しています。参加者は意外にもはじめは男子学生ばかりだったんですよ。料理なんてしたことない人ばかりで、最初は信じられないくらい不味かったですね。炭みたいな肉とか（笑）。でもみんな回を重ねるごとに上手くなって、「おいしい」って言われることがすっごく嬉しくなってくるんです。

“弁当塾”では活動目的を3段階つくっています。①喜んでもらう喜びを感じる、②過去を振り返り、親に感謝する、③未来のことを考える、です。これを押しつけるのではなく、みんなが自然と感じ取り、考えてくれるような活動にしていきたいと考えています。“弁当塾”は毎週木曜に実施していますが、ほかにも父の日にお弁当をつくるイベントや、生協のスタッフの方と開催する“大人弁当塾”も始めました。また、小学校での食育イベントの計画もしており、活動は広がりつつあります。

多くの大学生が、今しか見ていないし、日本の未来、地域の未来なんて無関係だと思っている。でもやっぱり、自分のことだけ考えていれば良いわけがないですよね。「食」を深く考えれば、必ず未来や他者に考えが及びます。

僕は弁当づくりを通して、生きていくための食の大切さに気づき、未来のために行動できるようになりました。みんな誰かのために何かしたい、このままじゃいけないという“種（たね）”は持っているんです。“弁当塾”に参加することで、芽が出る人もいるはず。この活動がそんなきっかけになれば嬉しいです。

吉田 恵太さん
野崎 潤さん（左から5人目・法学部4年生）
奥村 祥太さん（左から6人目・法学部4年生）

04 | Education, Unlimited

「食」と「農」を五感で学ぶ 持続可能な社会づくりを担う 人材育成

農学部 学部長就任予定
末原　達郎　教授

※2015年4月開設予定・設置認可申請中

複合的な視点を重視する

「21世紀は食料の時代だ」と言われて久しい。環境問題や農家の高齢化・後継者不足、農薬・化学肥料の過多、耕作放棄地の増加など、現代は数えきれないほど食料に関する課題を抱えている。とりわけ社会問題として顕在化しやすい産地偽装や食料自給率低下などは、ニュースを目にしない日はないほどだ。

来年開設を予定している農学部では、人間が生きていくうえで欠かすことができない「食」とそれを支える「農」を多角的な視点から学ぶ体制づくりが進められている。

学部長に就任予定の末原達郎教授（現経済学部教授）は、「『食』や『農』がこれほど問題を抱えている時代は過去に例がありません。今こそこれらの問題に向き合い、持続可能な社会づくりに貢献できる人材育成が必要です」と話す。

「例えば、先進国では毎日大量の食料が廃棄されていますが、一方で飢餓に苦しみ続けている国もあります。農業や食料の問題は突き詰めれば人間の営み。だからこそ、地球規模で起きている様々な問題について、広い視野と見識を持って解決に取り組むことが大切です」

農学部では「植物生命科学科」「資源生物科学科」「食品栄養学科」「食料農業システム学科」の4学科を設置。それぞれの専門分野に特化しながらも、個別に起きている問題を有機的に結びつける学びを特色とする。

「ひとくちに『農業』と言っても、生産から加工、流通、消費、再生といくつものプロセスがあります。農学部ではこれを『食の循環』と呼び、全てを総合的に学び、体験することを教育の基本方針として位置づけています」

従来の農学分野では、専門分野に特化するあまり、田植えをした経験がない農業経済学者やバイオサイエンス研究者も珍しくはなかった。農学部では、全学科合同で農作業の全プロセスを体験する「食の循環実習」をはじめ、「海外農業体験実習」「インターンシップ」など、教室を出て農業の現場で学ぶ機会を多く設けている。

「農学の良いところは、手作業が学問の基礎になること。机上の学びと同じくらい、農家の皆さんと一緒に手を動かして、食と農業にまつわる諸問題を身体で感じてもらいたいと考えています」

そう話す末原教授自身、アフリカを中心としたフィールドワークを通して、地球規模の食と農業について研究を続けてきた。現地の人々と暮らしをともにし、小さな農村に起きる多様な問題と向き合う日々は末原教授の原点だ。

「大学院生のときに初めてザイール共和国（現在のコンゴ民主共和国）へとフィールドワークに行きました。森林地帯で生活するテンボという民族の農業を調査することが目的でしたが、行ってみるとまず言葉がわからない。当時はテンボ語の辞書すらありませんでしたからね。聞いたこともない言葉と見たこともない景色。なにもかも手探りのなかで、アフリカ農業の調査研究が始まりました」

「水をください」「トイレはどこですか」と、日常生活に必要な言葉を覚えるようになると、現地の人々がとても親切に接してくれるようになった。村人達は日本からの若き研究者のために、決して豊富ではない食料を毎日交代で届けてくれた。

「死と隣り合わせの社会で食料を分配することの意味を知りました。経済的には豊かではないが、独占はしない。これは人間社会の根源であり、普遍的なシステムだと感じたんです」

大学院生時代にテンボの村に住み込む。食料のアンバランスと栄養不良は今でも深刻な問題だ。

現場主義が理解を深める

村人との交流が深まるにつれ、現地の生活が少しずつ理解できるようになった末原教授は、集落にある畑や山々の大きさを測量した。日本から持参した測量器は背の高いブッシュでは役に立たず、自身の歩幅で測量しスケッチで記録した。そうしてできた手づくりの資料をつなぎあわせて、自分だけのテンボ地図をつくりあげていったという。

「結局、最初の1年は研究らしいことはなにもできなかったんですよね。言葉の理解と、地理の把握、それと村の概要が少しわかったくらい。でも、知識はなくても体を動かしていたから充実感はありました。畑に行けば下手なりに農作業を体験することができるし、現地の人に知恵を教えてもらうこともできる。わからなくてもとにかくフィールドに出て、自然に触れて、体を動かす。その結果がデータとなって積み重なっていく。これは、現場ならではの学びでした」

帰国と渡航を何度も繰り返しているうちに、貧しい村の問題点を知り、その要因には国家や世界で起きている事象が関係していると感じた。

「農業で生計を立てている人々は、農産物が適性な対価で販売できなければ生活できません。それは発展途上国の山奥の村であっても同じです。野菜を売ったお金で医療費や教育費を支払い、ようやく人間らしい生活を営むことができる。現地でそのことを実感したときに、『ああ、これは農学だけでは解決できない。経済学や社会学、政治学など、あらゆる学問が必要なんだ』と痛感したんです。テンボの人々の経済的な貧しさは、当然、世界経済や日本社会のあり方にも関係している。物理的な距離は遠くても、自分達の生活につながっているとわかったんです」

一方、農学部では学びのテーマの一つに「地域の食文化」を掲げている。食と農を理解する第一歩として、生活に馴染み深い「日本食」や「関西の食文化」などを題材にした講義も予定している。

「龍谷大学がある京都・滋賀は、現代的な都市社会であり

テンボの女性達が協力して種子の植えつけをしている。女性のネットワークこそが、人々の食と命を守る。

ながら伝統野菜の供給地でもある希有な街。また、消費者の側にも、多様な食料を美味しく食べるための知恵が息づいています。農学を勉強するうえでは研究対象にとても恵まれたエリアです」

そして、農学部の大きな特色と言えるのが、建学の精神である仏教的な哲学・倫理観に基づいた教育展開。世界中の人々が共存共栄する持続可能な社会を考えるときに必要となる哲学的な考察を、釈尊や親鸞聖人の思想を通して求める内容だ。

「農学部新設にあたり集まった教員は皆、あらゆる分野の第一線で活躍するエキスパート。学生には在学中に多くの知識や文化と出会い、五感をフルに動員してこれからの食と農業を見つめてもらいたいですね」

末原 達郎・すえはら たつろう

1951年京都市生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程満期退学。農学博士。京都大学農学部教授を経て、2014年より経済学部教授、農学部設置委員会委員長。2015年4月に農学部食料農業システム学科就任予定。

研究分野は農業経済学、農学原論、アフリカ経済。アフリカでのフィールドワークを中心とした調査研究を重ねる。農学部では比較農業論、食料人類学などの科目を担当する予定。

著書に『文化としての農業 文明としての食料』(人文書館)、『人間にとって農業とは何か』(世界思想社)など。

04 | Education, Unlimited

文化の違いを理解することが、国際社会で活躍できるコミュニケーション能力を育む

国際文化学部
瀧本　眞人　教授
（国際学部グローバルスタディーズ学科所属予定）
※2015年4月開設予定

実践的な異文化間コミュニケーション

学生達が身振り手振りを交えて英語でメッセージを話す、その視線の先にはビデオカメラ。少し撮影してはビデオを止め、メッセージの内容や言葉選びをグループで話し合っては、またビデオカメラに向かう。

これは、瀧本ゼミが取り組むビデオプロジェクトのひとコマ。メルボルン大学（オーストラリア）と連携し、学生同士で定期的に交わしているビデオレポートの制作風景だ。

「私達は英語を、メルボルン大学側は日本語を学ぶ学生達が互いにテーマを設定し『母語ではない言葉でいかに自分の意見を伝えることができるか』を主題にビデオの制作をしているんです」と瀧本眞人教授は説明する。

制作したビデオはインターネットの動画サイトにアップロードして、メッセージ内容や言語の伝わりやすさなどについて意見交換しているという。

「テーマの設定から、リサーチ、撮影、編集などあまりに作業が多いため、このビデオプロジェクトはゼミの時間外におこなっているんです。つまり、学生達の自主性によって継続しているプロジェクトです。日本側のテーマは、『英語の支配、移民について』など、日本人の英語観や英語圏の文化を考えるものが多い。そこからさらにグループごとにテーマを設定し『日本人はなぜ英語に憧れるのか』といった具体的な問題について、自分達の言葉で伝えるようにしています。必要とあれば、学外へ出てアンケート調査をおこなうグループもあり、単なる国際交流にとどまらない学びの機会となっています」

このビデオプロジェクトをはじめとして、瀧本教授の講義には、単に言語学習にとどまらない実践的な内容が多く盛り込まれている。それは、20年以上を英語圏で過ごし、通訳者・翻訳者として活躍してきた瀧本教授自身の経験から生まれたものだ。

瀧本教授は、大学3年生の時に1年間の留学を経験し、大学院修了後は日本の民間企業に就職。充実した日々を過ごしつつも、「いつかは海外で働いてみたい」という漠然とした夢を持ち続けていたという。

「『ニュージーランドに新設される大学で教鞭を執らないか』と誘いがあったのは28歳の時でした。その大学では『国際関係論』を教えていましたが、海外で生活していると様々な場面で通訳や翻訳を頼まれることも多くなり、やがて本格的に通訳を学ぼうと考えるようになったんです」

ニュージーランドの大学を退職した瀧本教授は、オーストラリアのクイーンズランド大学大学院に入学。通訳・翻訳の手法や、異文化間コミュニケーションについて学び、卒業後はモナシュ大学の教員として後進の育成にあたった。また、大学教員として働くかたわら、通訳者・翻訳者としての仕事も多く経験。国際会議の同時通訳や政府発行書類の翻訳など、幅広い分野で活躍した。

瀧本教授の講義が机上の学びにとどまらず、コミュニケーションのあり方に重点を置いているのも、この豊富な実務経験に所以する。

文化の違いを認め、言葉を柔軟に操る

「通訳・翻訳の世界には、明らかな誤訳はあっても、絶対的な正解はありません」と話す瀧本教授。

「学生達によく話すのは、『文章をそのまま訳すのではなく、その言葉に込められたメッセージを伝えなさい』ということ。単なる英文和訳・和文英訳ではなく、書き手と読み手のことをイメージして、最適な言葉を選ぶことが大切なのです」

それが「訳」と「翻訳」の違いだ、と瀧本教授は言う。プロの通訳者・翻訳者にも個性があり、それこそがコミュニケーションの妙だ。特に同時通訳のようにスピードが求められる場面では、臨機応変な意訳が必要となる。

「例えば、1950年代に翻訳出版された『ひとまねこざる』という絵本の原文には『スパゲティ』が登場しますが、翻訳者は当時の日本人の生活感覚を考慮して『うどん』と訳しました。わかりづらい言葉を、読者の文化内で同じ意味を持つ言葉に置き換える大切さを考える良い事例です」

翻訳の方法は時代や文化によって変わる。一言一句を正確に訳すことよりも、文脈の意味を損なわずに理解しやすい言葉に置き換える柔軟さは、優れた通訳者・翻訳者に必須の感覚だと瀧本教授は言う。

「そのためには、双方の文化を深く理解する必要があります。いくら自動翻訳ソフトの精度が上がっても、通訳者・翻訳者が社会から必要とされる理由はここにあるんです」

来年度、国際文化学部は、国際文化学科とグローバルスタディーズ学科から成る国際学部へと改組し、深草キャンパスへと拠点を移す。国際文化学部が培ってきた留学サポートなどの強みをさらに高め、より国際色豊かな学部へと生まれ変わる。特に新設するグローバルスタディーズ学科では、半年間以上の海外留学の必修化や、専門科目の約8割を「英語のみ」または「英語・日本語の併用」でおこなう（2年次以降）講義方針など、社会で通用する国際コミュニケーション能力を効果的に養う内容が盛り込まれている。

また、英語水準向上のため、TOEIC®730点以上をはじめ、所定の英語運用能力の修得が卒業要件となるのも大きな特色だ。これは現在、国際文化学部に在籍している学生には適用されないが、瀧本ゼミでは「後輩に負けたくない」と、全員が卒業時のTOEIC®730点をめざして邁進しているという。

「3年生から取り組むにはかなりハードルが高い目標なので、私からは『ゼミ全員で平均730点をめざしてはどうだろう』と提案しましたが、学生達は真剣な議論を経て、あえて高い目標に挑戦することを決めたんです。もちろん結果も大切ですが、その意識の高さがなによりも素晴らしいと感じました」

来年からスタートする国際学部の新しい学びが、国際文化学部生にとっても良い刺激となっている。それは、学生達が、卒業後に国際社会で活躍することをはっきりとイメージしているからだろう。

「外国語の習得は、自分の生き方を変えアイデンティティにも関わってくる。これから社会に羽ばたいていく学生達にとって、海外で教育者、通訳者・翻訳者として活動してきた私の生き方が、良きロールモデルになればうれしいですね」

瀧本 眞人・たきもと まさと

1961年神戸市生まれ。広島大学総合科学部卒業。筑波大学大学院、クイーンズランド大学大学院を経て、モナシュ大学（オーストラリア）大学院人文社会科学研究科博士課程修了。

専門分野は、通訳・翻訳研究、応用言語学。

モナシュ大学人文社会科学部准教授を勤めるかたわら、会議通訳者・翻訳者としても活躍。アジア競技大会の公式通訳者として、当時、快進撃を続けていたなでしこジャパンの通訳なども担当した。

04 | Education, Unlimited

地域社会のエネルギー問題を変える「龍谷ソーラーパーク」

政策学部
深尾　昌峰　准教授

大学の社会的責任を果たす第一歩

東日本大震災以降、混迷する再生可能エネルギーの問題に、政策学部が取り組みを始めている。

深草キャンパスの建物屋上と和歌山県印南町に設置され、2013年11月から本格稼働を始めた地域貢献型メガソーラー「龍谷ソーラーパーク」は、太陽光発電によって得た売電利益を地域社会へと還元する事業モデルによって運営されている。深草キャンパス、印南町あわせて約7,600枚のソーラーパネルの発電量は年間約190万kWh。これは、およそ600世帯の電力消費量にあたり、金額にして約7,600万円（2012年度買取価格換算）の売電収入を生むという。

大学が再生可能エネルギー事業に取り組むのは全国でも初めてのこと。加えてこの事業には龍谷大学と印南町のほか、株式会社京セラソーラーコーポレーション、株式会社PLUS SOCIAL、トランスバリュー信託株式会社など、複数の民間企業や金融機関も連携しており、既存の事業スキームとはまったく異なる構造だ。

この事業を担当する政策学部の深尾昌峰准教授は「日本のエネルギー問題が局面を迎えている今、地域の再生可能エネルギーは、既存の常識にとらわれず新しい枠組みをつくる必要がありました」と話す。

「エネルギー政策が国まかせだったこれまでとは違い、震災後はエネルギー戦略を地域で考える必要がでてきました。そのなかでその事業収益を、地域社会のために活用できる循環型の構造が必要です」

この事業の特筆すべき点は、総事業費7億円のうち半分にあたる3億5千万円を龍谷大学が社会的責任投資（SRI：Socially Responsible Investment）と位置づけて投資しているところだ。大学の資産運用としては前例がないばかりか、安全性を第一義とした厳格な投資基準を有する龍谷大学にとっては、新規の非営利型事業への投資は画期的なこと。今回、龍谷大学は、龍谷ソーラーパークへの社会的責任投資に踏み切った。

「大学が果たすべき社会的責任を行動で示した好例となりました。私自身、龍谷大学の構成員としてとても誇らしく思います」

龍谷ソーラーパークで得た売電利益は、国が定める「再生可能エネルギーの固定価格買取制度」に基づいて、深尾准教授が代表取締役を務める非営利型株式会社PLUS SOCIAL（※）が収益化し、必要経費を差し引いて公共財団法人などへ寄付される。そこから地域のNPOや社会福祉施設、学校・幼稚園などへの助成金として活用される仕組みだ。

龍谷ソーラーパークは、白石克孝政策学部教授が代表としておこなった研究開発プロジェクト、「地域再生型環境エネルギーシステム実装のための広域公共人材育成・活用システムの形成」の研究成果である、「地域貢献型メガソーラー発電事業」をモデルに事業化したものだ。

「研究成果を実際の社会に『実装化』することは、大学の社会貢献のあり方の一つ。現実的には資金調達や収益分配などクリアすべき問題が多く、簡単なことではありませんが、龍谷ソーラーパークのように、大学や地域が覚悟を決めて取り組むことができれば決して不可能なことではない、と証明する機会にもなりました」

龍谷ソーラーパークは、今後20年間で約5億円の利益を見込んでおり、東日本大震災の被災地をはじめとする多くの地域から広く注目を集めている。

地域とキャンパスを往復して学ぶ

これまで再生可能エネルギーについての取り組みは、東京に拠点を置く大企業と地方の市町村による、共同事業といった構図がほとんどだった。地域活性化を目的に掲げつつも、結果的に収益の大半は東京へと流れることが問題視されており、事業に協力した市町村からは「結局、地域社会には何も残らなかった」といった声も挙がっていた。

深尾准教授は「仏教的な倫理観を持つ龍谷大学だからこそ、地域社会を主体に考えることができる」と話す。

「今、あらためて『地域社会が持続するために必要なこと』を見直す必要があります。建学の精神にある平和への思いや公共性は、『地域貢献』の事業をかたちにする際の拠り所となっているのです」

龍谷ソーラーパークの稼働開始に際して、赤松徹眞学長は、「将来のエネルギー問題についての議論が活発におこなわれている今、大学としてチャレンジできることはすぐに行動すべきだと考えている。その判断基準となるのは建学の精神だ」と語っている。研究成果を仮説にとどまらせず、積極的に地域の問題解決に活用する姿勢は、多様な価値観を認める建学の精神そのものだ。

龍谷ソーラーパークの建設中から深尾ゼミの学生達は足繁く印南町へと通い、率先して施工作業や緑化などに取り組んだ。

「学生達にとっては、これからの街づくりを考える良いきっかけになっています。地域の人達と交流し、一緒に地域の問題に向き合うことで、持続可能な社会の重要性を体感してくれたのではないでしょうか」

今後は、地元の小中学生を対象にした環境教育なども計画しているという。政策学部の学生達が「教えながら、学ぶ」場として、地域との結びつきを深めていく予定だ。

また地域が抱える多様な問題に取り組むため、今後は学部間の連携も強めたいと深尾准教授は話す。

「政策学は学際的な学問なので、どのような問題に取り組

むにしてもあらゆる学問から知恵を借りる必要があります。龍谷ソーラーパークの事業化でも金融については経営学、エネルギー問題は理工系の研究成果を参考にしました。現在は農業に関する問題に直面することが多く、とくに来春開設予定の農学部との連携には期待しています」

現在は、龍谷ソーラーパークがある印南町からほど近い有田市との間でも、再生可能エネルギーや今後の農業についての意見交換をおこなっている。今後は地域との交流を通じて、具体的な問題解決策を探る予定だという。

「学生達が社会で勉強させていただきながら、地域とキャンパスを往復する学び方が理想ですね。社会で起きるあらゆる問題と直面するなかで、自分の無知や足りない部分を自覚して、またキャンパスへ学びに戻ってきてほしい。よく『龍大生はおとなしい』なんて言われますけどとんでもない。私達が考えている以上に逞しいし、頼りがいがありますよ」

※非営利型株式会社：社会貢献などを目的に、剰余金を株主配当せずに寄付行為などで分配する法人

深尾 昌峰・ふかお まさたか

1974年生まれ。滋賀大学大学院修士課程修了。

教育学修士。阪神・淡路大震災で経験したボランティア活動をきっかけに、大学卒業後に「きょうとNPOセンター」を設立。その後、日本初のNPO法人放送局「京都三条ラジオカフェ」や「公益財団法人京都地域創造基金」などの設立・運営に携わり、地域社会の活性化や非営利組織の持続可能なあり方をテーマに活動をおこなう。

著書に『地域公共政策をになう人材育成』（共著　日本評論社）など。

05 | World, Unlimited

グローカルな視点が地方都市を変える

政策学部：
ドルトムント工科大学との
協働学習プロジェクト

フィールドワークを活用した「課題解決型」プログラム

政策学部が昨年からおこなっている、ドイツ・ドルトムント工科大学との協働学習プロジェクトが、内外から高い関心を集めている。これは、両大学で都市計画について学ぶ学生達が互いの国の特定地域が抱える課題について、グループワークやフィールドワークをおこない、英語を共通語として調査や意見交換をするという内容だ。事前・事後学習を充実させ、国際的な視点を取り入れた課題解決型のプログラムは、単なる語学留学にとどまらない学びの機会を生んでいる。

プロジェクトは2013年10月から2014年9月まで、約10カ月間にわたっておこなわれ、対象地域として日本からは尼崎市と福知山市、ドイツはデュースブルグ（Duisburg）とアルテナ（Altena）が選ばれ、それぞれの地域に各大学の学生が交互に滞在して街づくりについての課題を議論した。

プロジェクトを担当したのは、政策学部の村田和代教授（英語・異文化コミュニケーション）と、阿部大輔准教授（都市計画・建築計画）。言語と街づくり、双方の学びをバランス良く取り入れたところにこのプロジェクトの特色がある。

研究対象となる地域の選定については、京都市・ドルトムント市の周辺から、いくつかの共通点を持った都市が対象となった。「デュースブルグはドイツ有数の工業地帯にあり、重工業が衰退してから、産業構造の変化や人口減少などの大きな社会変革を経験しました。将来的に同じ問題に直面する可能性が高い尼崎市と比較することで今後の都市計画におけるヒントが見つかるかもしれないと考えたのです。また、大都市圏に隣接する地方都市として衰退の危機にありながらも活性化への取り組みをおこなうアルテナと福知山市には共通の課題も多く、ドイツと日本の街づくりを考える上で最良のフィールドでした」（阿部准教授）

この協働学習プロジェクトには、ドルトムント工科大学から13名、龍谷大学からは1年生から大学院生までを含む9名の学生が参加した。今年2月には、ドルトムント工科大学から教員と学生が2週間の日程で来日し、深草キャンパスを拠点に尼崎市、福知山市のフィールドワークをおこなった。

「ドルトムント工科大学の学生は空間計画学を専攻しているため、建築や空間設計の視点から都市を見ていたのが印象的でした。例えば『車のスピードを抑制するため、道路をもっと緑化すべきだ』というように、まずは都市全体の設計図を描こうと考える。一方、龍谷大学の学生は街づくりの視点から、都市政策や活性化案などに着目することが多かったですね」（阿部准教授）

当初は、ドルトムント工科大学の学生から次々と出る「日本らしさ」への質問に、龍谷大学の学生が困惑することも多かったという。「日本の住宅密集地では、庭の植木が少し道路にはみ出ていることなんて珍しくありませんよね。そんな、私達にとっては当たり前の風景も、ドイツ人からすればまったく理解できないこと。また質問には明確な回答を求めてきますから、『下町っぽいね』なんて曖昧な返事では納得してもらえません。（龍谷大学の）学生達は、これまで考えもしなかったであろう日本の生活環境や文化をあらためて見直し、それを英語で必死に説明する場面が多く、それも良い学びになったと思います」（阿部准教授）

そして、3月には龍谷大学の学生がドルトムントを訪問。各都市を歩き、気づいた点を地図に描き込んで議論する日々が続いた。交通事情や移民問題など、10日間の滞在で数えきれないほどの現地事情を学んだ。

「学生達に感じてほしかったのは、日本とドイツの事情を分けて考えずに相対化すること。一つの都市で起きている現象は、世界中のどの都市でも起きる可能性がある。グローバルとローカルを柔軟にとらえるグローカルな視点が、一つ地方都市の問題解決につながるんです」

体感する異文化コミュニケーション

異文化コミュニケーションを専門とする村田教授は、このプロジェクトで最も印象に残った点に「母国語を使わずに議論をする利点」を挙げる。「龍谷大学の学生にとって良かったことは、相手も英語のノンネイティブだったことです。ドイツ人はとても英語が上手ですがネイティブではないので、同じノンネイティブを相手に伝わりやすく話し、一生懸命聞くことに慣れています。それが英語に苦手意識がある日本人にはとても相性が良かったんです」(村田教授)

しかし、最初からコミュニケーションが円滑だったわけではない。事前講義で英語を集中的に学んだものの、両大学の学生が京都で初めて顔をあわせたときには、龍谷大学生のほとんどがうまく話すことができなかったという。

「最初の1週間は通訳を通してなんとか会話している状態でしたね。でも、驚いたことに2週目頃から急にスイッチが入ったように、全員が日常会話から議論までをこなせるようになったんです」(村田教授)

道路の作り替えが地方都市の再生にどのように寄与するのか、議論に使用した事例の写真。

その理由は、プロジェクト以外での交流だった。龍谷大学の学生達は学習以外の時間にドルトムント工科大学の学生を誘って観光やカラオケ、居酒屋などでともに過ごした。言葉がうまく伝わらなかった1週間、まずは友人として関係を育んでいたのだ。「ドイツ訪問時にも同じように、ドルトムント工科大学の学生達が街を案内してくれて、後半のワークショップでは、当たり前のように英語で議論が交わされていました。プログラム終了後にはドルトムント工科大学の教授から『うちの学生の英語力も上がりましたよ』とも言われました。英語は都市計画という課題に取り組むために必要なツールでしたが、学生達にはその習得プロセスでも多くの気づきがあったのではないでしょうか」(村田教授)

プロジェクトに参加した政策学部の大西妃歌さんと藤野里咲さん(ともに参加当時3年生)は、「ドイツ滞在はあらためて日本の街づくりを考えるきっかけになりました。自分の意見をうまく伝えられないときはもどかしかったですが」(大西さん)、「疑問に感じたことはすぐに質問する、主張はしっかり伝える。議論のあり方や視点の多様さを学んだことが、大きな経験になりました」(藤野さん)と振り返る。

このプロジェクトは、2014年度後期から「政策実践・探求演習B」として正式な科目となる。今後はドルトムント工科大学以外との協働学習も視野に入れ、より実践的な学びの機会としていく予定だ。

06 | Ryukoku Event

蘇れ、一世紀前のこころざし

龍谷ミュージアム秋季特別展

「二楽荘と大谷探検隊
－シルクロード研究の原点と隊員たちの思い－」

10月4日(土)～11月30日(日)

主催：龍谷大学 龍谷ミュージアム、京都新聞、神戸新聞社

二楽荘。それは、仏教伝来のシルクロード周辺地域の研究功績で名高い大谷探検隊、その総指揮者・浄土真宗本願寺派第22世宗主大谷光瑞師の理想が詰め込まれた、大型プロジェクト拠点であった。

光瑞師の保養所としてだけでなく、多岐分野にわたる学術研究施設として、教育機関として、時には博物館として、約100年前の日本で、最先端の挑戦を集めて異彩を放ちつつ華やかに存在していたその理想郷は、光瑞師の管長辞任と同時に6年間の濃密な生涯を終え、売却された後は荒廃し、昭和7年の不審火でまるで幻のように姿を消した。短命だったからこそすぐに謎に包まれてしまったこの二楽荘に惹かれ、専門の考古学から近代研究の世界へと導かれていったのが、今回の秋季特別展を担当する学芸員の和田秀寿さん。和田さんに鑑賞のポイントを聞いた。

二楽荘があった地は現在の神戸市東灘区、当時の通称「天王山」。山麓を階段状に削り出すかたちで、明治42(1909)年に本館が竣工し、その後順次付属施設が建設された。総面積は24万坪を超える。本館の外観はインドのタージ・マハルを模したとされ、光瑞師の盟友ともいえる、東京帝国大学教授の伊東忠太(後に伝道院や築地本願寺を設計)が建設助言に入っていた。学生の教育をおこなう私塾・武庫中学の校舎とその図書館や学生寮、気象観測所、印刷所、果樹園(日本ではじめてのマスクメロン栽培)、日本初のケーブルカーなどが設置されていたという。

「二楽荘本館の内部については、これまで、印度室、支那室、アラビア室など、各国をテーマに部屋が作られていたことはわかっていましたが、その間取りなど詳しいことが不明でした。ところが今回、展示準備の過程で、二楽荘内部の平面図が発見され、建物の内部の配置が明らかになりました」

見どころは、新しく明らかになった二楽荘本館の配置を、本学理工学部の岡田研究室がコンピューターグラフィックスで再現。世

界各国の文化の魅力を日本に紹介する意図でデザインされた、当時最先端の建築である二楽荘内部を、映像で見学できることになりそうだ。

二楽荘には大谷探検隊がシルクロードから収集した資料がまさに持ち込まれ、調査研究、時には展示公開されていた。そのつながりから、特別展では大谷探検隊関連資料もあわせて紹介される。が、今回はこれまでのような将来品の展示とは異なる。「隊員たちの思い」をテーマに、当時現地へ赴いた若き探検隊員や随行員40数名の一人ひとりに焦点を当て、その派遣の背景から旅の軌跡、帰国後の行方について明らかにする。隊員の手紙や日記など、400点近くの資料のうち約70%が初公開のもので、探検隊員に選ばれた青年達の人生ドラマ渦巻く空間となりそうだ。

「それぞれの隊員のご子息など全国30カ所ほどに連絡をとって集まってきた個人の日記やゆかりの品などを展示いたします。興味深いのは探検隊員選出の理由で、隊員は20歳前後の若者になるのですが、大学の成績だけでなく、当時の端艇部、柔道部の部員など、文武両道の優秀者が厳選されていたことがわかりました」

船までは皆一緒だが、大陸に着けばそれぞれ単独や合流を繰り返して行動、異国で人間関係を構築して探索を進めるため、心身ともに頑丈である必要があったのだろう。日記からは、仏教研究への使命感や、郷愁の思いも読み取れる。なかには家族と離れたまま現地で亡くなった隊員のものもあり、無念が伝わり涙しそうになるほどであるという。

「100年前の青年隊員達には残念ながら、もうご存命の方はいらっしゃいませんが、この展示で一堂に会してもらい、わいわい同窓会をしてもらえたらという気持ちです。皆さん、特に学生さんにはぜひ、この時代の青年達のこころざしを感じていただければ嬉しく思います」

和田 秀寿（龍谷ミュージアム学芸員）

06 | Ryukoku Event

食の循環トークセッション

農学部就任予定教員などが、「食」と「農」にまつわる様々な課題に取り組むトップランナーをゲストに迎え、「食の循環」をキーワードに、諸課題の本質的な解決に向けたトークセッションを開催している。これまでにおこなわれたトークセッションの概要を紹介する。

●第１回

「京のおばんざい」に学ぶ和食の継承と食の循環

～ 和食は無形文化遺産登録へ ～

ゲスト：杉本 節子 氏（料理研究家他）

日時：2013 年 12 月 13 日（金）　会場：龍谷大学深草町家キャンパス

●第２回

農山村から創りだされる食の循環

～ 地域事業の在り方から見る、地球農業連携の未来 ～

ゲスト：高田 実 氏 ※(有限会社篠ファーム代表)　※開催時の氏名　現 高田 成に改名

日時：2014 年 3 月 7 日（金）　会場：龍谷大学大宮キャンパス

●第３回

日々の生活から創りだす食の循環

～「半農半 X」ライフスタイルに農を取り入れる方法 ～

ゲスト：塩見 直紀 氏（半農半 X 研究所代表）

日時：2014 年 6 月 20 日（金）　会場：グランフロント大阪 南館 6F 紀伊國屋書店

●第４回

都市と農村をつなぎ、食の循環を取り戻す試み

ゲスト：西辻 一真 氏（株式会社マイファーム代表取締役）

日時：2014 年 7 月 26 日（土）

会場：「川の駅」はちけんや B1「XingGARDEN（クロッシングガーデン）」

●第５回

地球規模の問題を解決する「新しい農業」のクリエイトと「食の循環」

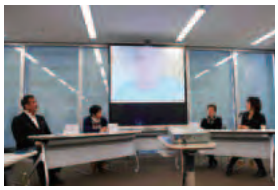
ゲスト：小林 直樹 氏（ヤンマー株式会社 常務取締役 農機事業本部長）、
　　橋本 康治 氏（同社農機事業本部 企画部ソリューション推進部長）

日時：2014 年 8 月 30 日（土）　会場：龍谷大学瀬田キャンパス青雲館

予告　●第６回　ゲスト：未定　日時：2014 年 10 月上旬開催予定　※詳細は決定次第、本学 Web サイト等でお知らせいたします。

多文化共生トークセッション

国際文化学部教員が、「多文化共生」を実践しているゲストを迎え、グローバル化する社会の未来を切り拓くべく、トークセッションを開催している。これまでにおこなわれたトークセッションの概要を紹介する。



●第１回

スポーツを通じた国際的な出会いと多文化共生

ゲスト：野口 忍 氏（トレック・ジャパン株式会社 マーケティング統括）、大内 寛文 氏（龍谷大学ラグビー部監督）

会場：龍谷大学大阪梅田キャンパス

予告
●第２回　ゲスト：渡部真由美 氏（元国連職員）　日時：2014 年 9 月 28 日（日）　場所：深草キャンパス４号館地下カフェスペース
●第３回　ゲスト：J・A・T・D にしゃんた 氏（社会学者、羽衣国際大学准教授）　日時：2014 年 10 月下旬　場所：未定
※詳細は決定次第、本学 Web サイト等でお知らせいたします。また予告の内容は予定であり、変更する場合があります。

本トークセッションは、USTREAM でも同時配信しており、これまで実施したトークセッションについてもご覧いただくことができます。
www.ustream.tv/user/ryukoku-talksession

予告

国際学部開設記念 グローバル教育フォーラム

国際学部がめざす「グローバル人材育成」

世界を舞台に活躍している第一人者の提言から、グローバル時代に求められる人材の育成と教育の形について考える。

日時：2014 年 9 月 21 日（日）　会場：龍谷大学響都ホール校友会館　主催：龍谷大学　共催：朝日新聞社

《基調講演》

「競争力としての人財のダイバーシティ　～ グローバル・リーダーの要件～」

橘・フクシマ・咲江氏（G&S Global Advisors Inc. 代表取締役社長）

《パネルディスカッション》

「グローバル化とグローバル人材の捉え方」

パネリスト

橘・フクシマ・咲江 氏（G&S Global Advisors Inc. 代表取締役社長）

中村 俊裕 氏（米国 NPO コペルニク共同創設者兼 CEO）

中根 智子（龍谷大学国際文化学部専任講師）

コーディネーター

一色 清 氏（朝日新聞社教育コーディネーター）

予告

日経ユニバーシティコンソーシアム

日本を変える農業の未来

日本の食と農業の明るい未来を展望するために、命を支える食と農について考える。

日時：2014 年 11 月 11 日（火）　会場：日経ホール　主催：龍谷大学　共催：日本経済新聞社

《基調講演》

「未来の日本が変わる、日本を変える農業の未来」（仮）

藤田 正美 氏（ニューズウィーク日本版 元編集長 / フリージャーナリスト）

《パネルディスカッション》

「次世代の農業のカタチとグローバル時代の食の循環」

パネラー

加藤 百合子 氏（エム･スクエアラボ代表）

高橋 拓児 氏（木乃婦 三代目）

向笠 千恵子 氏

末原 達郎（龍谷大学農学部学部長就任予定）

コーディネーター

木場 弘子 氏（キャスター・千葉大学客員教授）

予告

理工学部シンポジウム

社会に貢献する理工系グローバル人材の新展開

グローバル化が進む国際社会において、日本のものづくり企業が世界市場でリーダーシップを発揮するには、国際的な事業展開を担う課題解決型のグローバル人材が必要である。2013年度に学部開設25周年を迎えたのを機に、今後どのように教育･研究の国際化を推進するか、社会に広く情報を発信する。

日時：2014 年 10 月 29 日（水）　会場：龍谷大学瀬田キャンパス 8 号館 103 教室

《基調講演》

「ボローニャプロセスの展開およびヨーロッパにおける高等教育の質保証と倫理教育の将来構想」

Claudio Fiegna 氏（イタリア・ボローニャ大学学長代理）

「大学の国際化とグローバル人材育成」

佐野 太氏（文部科学省 大臣官房審議官・高等教育局担当）

《パネル討論会》

「グローバル社会のなかで科学技術の発展に資する教育の質保証と倫理教育の必要性」

パネラー

Claudio Fiegna 氏（イタリア・ボローニャ大学学長代理）

Jean-Pierre Delplanque 氏（アメリカ・カリフォルニア大学デービス校工学部副学部長）

Cheng-Chung Lee（台湾・国立中央大学理学部長）

Samson Sajidu 氏（マラウイ・マラウイ大学理学部長）

恩田 徹 氏（京都市立堀川高校校長）

モデレーター

大柳 満之（龍谷大学理工学部長）

07 | News & Topics

最新情報

硬式野球部、全日本大学選手権で初戦突破!!

4季ぶりにリーグ優勝し、「第63回全日本大学選手権」に出場した硬式野球部。初戦、国際武道大学に4－1で勝利し、全国の舞台で1勝を飾った。大符投手（国際文化学部2年）の好投もあり、総動員総力戦で勝ちとった一戦だった。在学生や保護者の方々、東京近郊の校友会の方々も応援にかけつけ、スタンドは大いに盛り上がった。残念ながら2回戦で東海大学に0–2で敗れ、ベスト8へは進めなかった。

柔道部・西川選手、東アジア柔道選手権大会で個人戦、団体戦の両方で見事優勝

5月9日、10日にモンゴルのウランバートルで開催された「第7回東アジア柔道選手権大会」に、西川真帆さん（文学部4年/写真左から2番目）が女子63kg以下級の日本代表として初出場。海外戦初出場で個人戦初優勝の快挙を成し遂げた。
団体戦でも日本代表チームの中堅として全2試合に出場し、モンゴル戦、韓国戦ともに大外刈りによるオール一本勝ちで、日本代表チームの優勝に大きく貢献した。

〈西川さんのコメント〉
「日本代表として、初めての国際大会で結果を残せたことを嬉しく思っています。海外選手は力が強く、勝ちに対する気持ちが強かった。この結果に満足することなく、一つの自信としてこれからもがんばっていきます」

バドミントン部・下田選手、世界学生選手権で堂々の3位入賞!

7月24日～29日にスペインのコルドバ市で開催された「第13回世界学生バドミントン選手権大会」で、下田菜都美さん（経済学部2年）が強豪国であるタイと韓国の一番手の選手を見事に破り、個人戦シングルス部門で見事3位入賞を果たした。
団体戦でも出場2試合全て勝利し、ベスト8まで進んだ。

＜下田さんのコメント＞
「団体戦で優勝できなかった悔しさが、個人戦でプラスに働いてくれた。最低限のメダルは取れたので嬉しかったが、優勝をめざして練習してきたので悔しい気持ちで一杯です」

チームバトンの部、18年連続優勝

7月5日に本学深草キャンパス体育館で開催された「第36回関西学生バトン・チアコンテスト」において、バトン・チア・SPIRITSは、チームバトンの部で「Crimson Rhapsody」の演技でグランプリを受賞、18連覇を達成した。
また、チアリーディングの部では「On heart On mind」の演技で金賞を、そしてソロトワールの部（最上級部門）に出場した上林眞奈さん（国際文化学部2年）がグランプリを受賞した。

<チームバトンリーダー：石神華子さん（文学部4年）のコメント>
「今回の結果は、コーチ、先生方をはじめ、応援してくださった皆様の支えがあったからこそ。新チームとして踏み出したばかりですが、次の大会に向けて、チーム一丸となってがんばりたいと思います」

バレーボール部男子が西日本インカレで初優勝、女子は昨年に続き準優勝

6月23日から広島市グリーンアリーナで開催された「第40回西日本大学男子インターカレッジ」で、男子バレーボール部が初優勝を飾った。東海学連、関西学連、中国学連、四国学連、九州学連の61大学が参加した大会で、予選から速い攻撃と粘り強い守備で決勝トーナメントに勝ち進んだ。ベスト4をかけた試合では、東海学連2位の名城大学にセットカウント2-1から逆転し、平成5年以来21年ぶりにベスト4進出。勢いは止まらず準決勝は甲南大学、決勝戦は近畿大学に勝利し、念願の西日本王者となった。
また、同日程で神戸グリーンアリーナにおいて開催されていた「第40回西日本大学女子インターカレッジ」で、女子バレーボール部が昨年に続き2年連続の準優勝を果たした。

関西学生女子柔道優勝大会で柔道部女子チームが2年連続優勝

5月25日にベイコム総合運動公園で開催された「関西学生女子柔道優勝大会」で、柔道部女子チームが2年連続で優勝した。初戦の立命館に3－2で勝利、決勝戦で4勝1引き分けで天理大を圧倒し、見事大会2連覇を果たした。

龍谷大学付属平安高校、春夏連続甲子園出場

春の選抜で優勝した龍谷大学付属平安高校は、夏の京都大会でも2年ぶり33度目の優勝を果たし、春・夏連続で甲子園出場が決まった。開会式直後の開幕試合、選抜王者の重圧からか春日部共栄高校（埼玉）に1–5で敗れ、春・夏連続優勝の夢はかなわなかった。龍谷大学からも多くの学生や職員がかけつけ、最後まで声援を送っていた。

京都市上下水道局と龍谷大学が連携し、京都の水道水のおいしさとクオリティをPR 龍大生が水を使ったメニューを考案し、祇園祭で「京（みやこ）の水カフェ」をオープン

経営学部藤岡ゼミが、京都市上下水道局と連携し、京都の水道水のおいしさとクオリティの高さ（安全・安心、低価格、環境にやさしい）をPRするため、祇園祭期間中に「京（みやこ）の水カフェ×龍谷大学」を開催。「京（みやこ）の水カフェ」とは、京都市上下水道局が実施する「おいしい！大好き！京（みやこ）の水キャンペーン」の一環として開設するカフェで、協賛企業の小川珈琲株式会社から本格的な技術指導を受けて、学生がメニューを考案。店内外の装飾、展示、接客も学生が担当し、祇園祭の期間中、多くの方々に京都の水道水のおいしさとクオリティを改めて知っていただく機会となった。

「地球がキャンパスだ」プログラムを開催

本学で学んでいる交換留学生に、自国の言語や文化を本学の日本人学生や他国から来た留学生に紹介してもらう、言語・文化交流プログラム。2013年度から国際センターで開始したプログラムで、毎回各国の留学生がトピックを独自に設定し、レクチャーしている。
6月17日には、スロバキアからの交換留学生により「スロバキアの言葉や文化」をテーマに行われた。

理工学部生が公共広告CM学生賞で奨励賞

公益社団法人ACジャパンが主催する「第10回ACジャパンCM学生賞」で、理工学部情報メディア学科3年生の佐藤遥さん（写真左）と土屋汐里さん（写真右）のグループが、『「僕」と「私」』という作品で奨励賞を受賞。今回は全国各地の大学から176作品の応募があり、本学としては昨年度に引き続き4度目、理工学部情報メディア学科としては3度目の受賞となった。

「祇園祭ごみゼロ大作戦」に龍大生が参加、リユース食器の導入で、ごみゼロをめざして活動

「祇園祭ごみゼロ大作戦」は、祇園祭に出店する屋台から排出されるごみをゼロにすることを目的とした活動で、再利用（リユース）食器を使うことにより、食品トレーや紙コップをはじめとするごみの排出量を減らすプロジェクト。約60万食分の使い捨て食器を、洗って再利用できるリユース食器に切り替える、日本初であると同時に、世界初の試みだ。
２０１４年の祇園祭から初めて実施され、本学学生も、政策学部の学生を中心に約260名が参加し、期間中ごみゼロをめざして積極的に取り組んだ。

瀬田キャンパスに「イングリッシュラウンジ」を開設

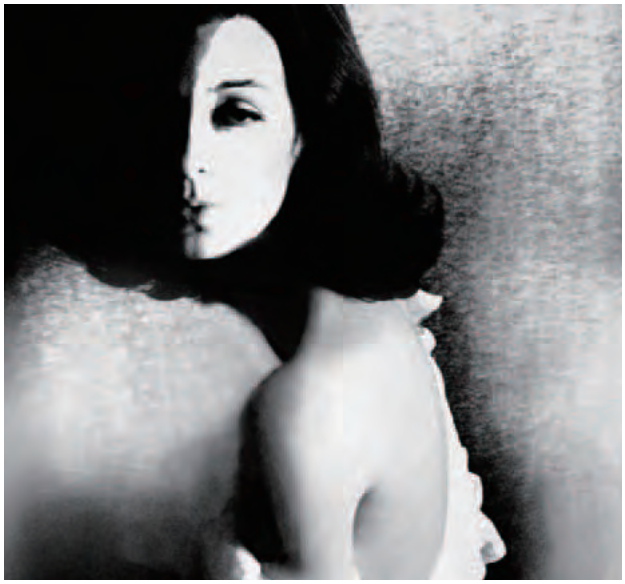
瀬田キャンパスの理工学部、社会学部、国際文化学部が連携して、学生が日常的に英語で交流し、グローバル社会で求められる英語コミュニケーション力を向上できる環境を整えるため、「イングリッシュラウンジ」を5月9日に開設した。
ここでは、本学教員をはじめとするネイティブスタッフが中心となり、原則として日本語の使用を禁止し、英語のみでコミュニケーションをする。英語が得意な学生だけでなく、英語の楽しさや重要性に気づいていない学生が積極的に利用することにより、実践的な英語コミュニケーション力が身につけられ、キャンパス内で海外留学の雰囲気を手軽に体験することができる。

龍谷大学と南三陸町舞踊の会による交流ジョイントコンサートを開催

5月31日、龍谷大学響都ホール校友会館にて、龍谷大学と南三陸町舞踊の会が交流ジョイントコンサートを開催した。
このジョイントコンサートは、南三陸町舞踊の会による舞踊と龍谷大学の華舞龍、吹奏楽部による舞や演奏を通じて、学生と東日本大震災被災地との交流をより深めることを目的として開かれた。

サッカー日本代表応援プロジェクトパブリックビューイング開催

スポーツサイエンスコースが、サッカーワールドカップ日本対コートジボワール戦のパブリックビューイングを実施。この取り組みは、スポーツサイエンスコース・スポーツマネジメント研究室の学生が中心となり、講義などで学んだスポーツイベントの企画・運営などのマネジメントの実践学習として企画したもので、300人を超える学生・教職員が参加した。



CARMEN, early 1950's © Lillian Bassman

大宮学舎にてKYOTOGRAPHIE 国際写真フェスティバル「Signature of Elegance リリアン バスマンの仕事」を開催（シャネル・ネクサス・ホール プレゼンツ）

KYOTOGRAPHIE国際写真フェスティバルは、京都がより美しくなる春の観光シーズン最盛期の約3週間にわたり、寺社や町家など京都ならではロケーションを会場とする、日本では数少ない写真の祭典だ。
国の重要文化財に指定されている本学大宮学舎本館も展示会場となり、斬新かつ革新的な方法でファッションフォトの世界に新たなイメージを築いた、リリアン バスマンの写真が展示された。
リリアン バスマンは、優れた写真家に贈られる国際写真賞のルーシー・アワードを受賞した戦後世代の伝説的な写真家である。
また、写真展期間中は、大宮学舎本館のほか、本学の施設である龍谷ミュージアムや深草町家キャンパスでも、関連イベントが開催された。

未来の地域政策を“志考”する自治体職員ゼミ「みらいゼミ」を開催

「みらいゼミ」は、今後の自治体運営を描く力と、多様な主体と連携して地域課題の解決に取り組む力を伸ばすプログラムで、プログラムを通じて自らの政策課題を探求し、課題解決の「まちの戦略会議」を構想・企画する。形だけの「協働」や既存のつながりに閉じた「連携」を越える新しい政策形成の思考と方法を学ぶものである。

龍谷大学アバンティ響都ホールに校友会館を開設、オープニングレセプションを開催

5月24日、校友会設立115周年を記念して、JR京都駅八条口前の「龍谷大学アバンティ響都ホール」に校友会館を開設した。あわせて、同ホールを「龍谷大学響都ホール校友会館」へと改称。当日は、マリアージュグランデにおいてオープニングレセプションを開催し、赤松学長と村上校友会会長により覚書の交換がおこなわれた。

「薬師寺声明の世界」「本願寺声明の世界」を開催

宗教部ならびに仏教学科（龍谷学会）が、5月30日に「薬師寺声明の世界」、6月27日に「本願寺声明の世界」を開催した。釈尊以来2500年が経過するなかで、「経典読誦」のあり方は華麗な旋律を伴った「声明」へと発展、今日に至った。参加者は、厳粛ななかに妙なる旋律を持つ「声明」の世界、その深い世界観を体感した。

短期大学部に国際福祉コース設置、記念シンポジウム開催

2015年４月に龍谷大学短期大学部社会福祉学科に国際福祉コースが開設されることを記念し、「グローバル化・高齢化する社会の福祉課題－共に生きる地域をめざして－」というテーマのセミナーを開催した。在日外国人高齢者の在宅支援をテーマにした第１部のお芝居、３名のシンポジストによる第２部のシンポジウムの2部構成でおこなわれた。

議員政策力フォーラム「質問力研修」を開催

質問力研修は、実際におこなわれた一般質問を、議員や議会答弁経験豊かな自治体職員、研究者のアドバイザーで構成する少人数グループで検討し、監査力や政策提案力のある一般質問作成のための理論、理念、コツや技法を学ぶもの。今回の研修には、関西圏だけでなく神奈川県や大分県など広域から市会議員ら12人が参加し、「議会改革をさらに推進する学びを深めたい」と研修に手応えを感じられていた。

東アジアからコモンズを考える コモンズ・里山国際シンポジウムを開催

6月7日に深草学舎にて龍谷大学里山学研究センターと済州大学校SSK研究チームが協力して深草学舎にて「コモンズ・里山国際シンポジウム」を開催。東アジアにおけるコモンズやSATOYAMA的自然・社会関係の意義について韓国、台湾、日本のコモンズとコモンズ論について、それぞれの歴史や現状を検討し、比較研究へ踏み出す第一歩となった。

REC顧問 上條榮治氏が、近畿経済産業局より「施策功労者感謝状」を授与された

経済産業省近畿経済産業局から「豊富な産学連携の経験により培った幅広い知見を活かし、戦略的基盤技術高度化支援事業（サポイン事業）を通じたものづくり中小企業支援に多大な貢献をされた」として、上條榮治REC顧問のこれまでの功績に感謝の意が伝えられるとともに、「施策功労者感謝状」が授与された。

理工学部 永瀬純也助教が「ネイチャー・インダストリー・アワード」で日刊工業新聞社賞を受賞

「ネイチャー・インダストリー・アワード」は、動植物が有する自然界の機構や機能など“自然の叡智”を産業技術へ応用し、産業界とのマッチングを図ることを目的としている。永瀬純也助教の研究「アメーバの推進原理にヒントを得た狭路走行型クローラロボット」が受賞した。

岡田清孝教授（農学部就任予定）が、日本植物学会賞で大賞を受賞

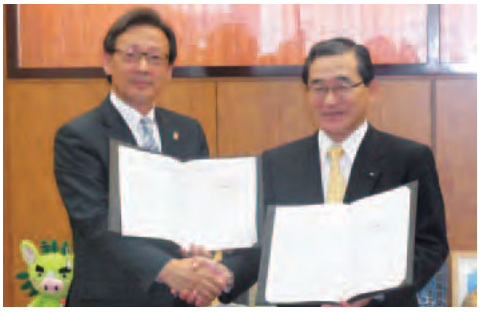
2015年度より農学部植物生命科学科就任予定の岡田清孝教授が、平成26年度（第11回）日本植物学会賞において「大賞」を受賞した。岡田教授は今年度より本学経済学部教授就任。2015年度より農学部植物生命科学科で「分子遺伝学」などの科目を担当予定。

スポーツサイエンスコース松永ゼミの学生が「ベースボールビジネスアワード2013」で大賞・優秀賞をダブル受賞

「大学生のベースボールビジネスアワード2013」（読売新聞社主催）は、大学生がプロ野球球団の集客策や新たなビジネスモデルを提案するコンテストで、スポーツサイエンスコース松永ゼミの学生が大賞と優秀賞に選ばれ、3月22日、東京ドームにてオープン戦前に表彰された。

滋賀県中小企業団体中央会と龍谷大学が「産学地域連携基本協定」を締結

滋賀県中小企業団体中央会と龍谷大学は、3月6日に「産学地域連携基本協定書」を締結した。この協定では、滋賀県内の中小企業の活性化推進のため、技術力および経営力の向上と人材育成にかかる分野において連携を図り、地域経済の発展に資することを目的としている。



鹿児島県と龍谷大学が就職支援に関する協定を締結

7月28日、鹿児島県と龍谷大学が連携し、本学に在籍する鹿児島県出身の学生の就職支援などをおこない鹿児島県の活性化を図るとともに、本学の教育、研究、就職支援に寄与することを目的として、協定を締結した。これにより、大学と自治体が組織的に連携した就職支援が展開できるようになった。今回で本学と自治体との就職協定は9県目だ。

08 | People, Unlimited

龍谷人

天王寺雅楽とともに生きた道

願泉寺住職
天王寺楽所雅亮会楽頭

小野 功龍さん

大陸から仏教とほぼ同時期に伝わったとされ、平安朝時代に大成されたわが国の雅楽。宮廷内や寺院や神殿などを背景にして、舞と歌と管弦がおりなす耽美な色彩と響き。それらは祈りの異空間をつくり出し、かつてより宗教儀式と切り離せないものであった。伝承は宮廷、南都（奈良）、大阪天王寺の三箇所でおこなわれ、その一つである大阪の天王寺楽所は、聖徳太子建立の四天王寺の聖霊会（聖徳太子の命日の法要・毎年4月22日）での演奏を中心に継承。明治の廃仏毀釈後、三方の楽人が東京に集められ天王寺楽所解体の危機が訪れたが、大阪願泉寺の住職小野樟蔭氏が、民間や旧楽人を集めて「雅亮会」を設立し、天王寺流の再興を図った。四天王寺聖霊会の舞楽は吉田兼好の徒然草で「天王寺の舞楽のみ都に恥ぢず」（第220段）と語られたほどで、昭和51年には国の重要無形民俗文化財に指定されている。

小野功龍さんはその「雅亮会」設立者小野樟蔭氏の孫にあたる。はじめて楽器をもったのは8歳の頃で、本腰を入れだしたのは大学時代以降。恩師にもめぐり会い、本格的に研究と演奏活動を始めた。時を同じくして、大阪では万国博覧会が開催された。日本文化が注目され、海外からの観光客の前で雅亮会が演奏する機会もあった。

「私自身も、万博で世界各地の文化に触れてそれらへの興味を抱き始め、同時に自分がたずさわる雅楽への関心もより深まってきました。その刺激をきっかけに『よし、海外でやろうや』となってね。雅亮会は海外へも飛び出し、雅楽を紹介する公演を始めました。アメリカやドイツ、イタリア、中国などに行きましたね。異国の景色とコラボレーションした響きもまた、不思議な魅力がありました」

そういったこれまでの雅楽の国内外への紹介、伝承活動の功績で、小野さんは2013年度の日本芸術院賞を受賞された。つい今年の7月に東京で授賞式があり、晩餐会では天皇皇后両陛下と直接お話を交わす機会も設けられたという。

宮内庁雅楽の曲目には、演奏する機会がなくお蔵入りのものも多いそうだが、天王寺楽所雅亮会のレパートリーはおよそ80曲で、そのほとんどを小野さんは記憶している。担当の楽器は笙。その音色はよく雲間から差す光と例えられる。「すでに和音ができあがっているから、簡単そうだなと最初思ったんですよ」と茶目っ気たっぷり。「人の腹からの呼吸と、この10本の指を使って、あれだけ幅広い、繊細で幻想的な和音が鳴らせるというところが魅力ですね」

雅楽のこれからに思いを馳せてみる。日本古来の信仰や自然風土との関係が深いからこそ、その継承がむずかしく同時に今後の雅楽伝承も簡単な道ではないのでは。「たしかにそのとおりです。しかし全国各地から、雅楽をやってみたい、聴いてみたいといった声は絶えず上がっています。興味を持ってくれる人がいる。そのことに希望を感じます」と小野さん。「最近では、篳篥のリード部分に使われるヨシの産地である大阪府高槻市の鵜殿のヨシ原が、高速道路建設計画で消滅の危機にあります。そんなニュースには困難も感じますが、同時に技術の進化によって、プラスチック素材でもそんなに音の悪くない雅楽器が製造されていたりします。これは高価な雅楽器を購入するのがむずかしい初心者にとっては、雅楽への敷居を下げてくれる嬉しいことですね。いいことだと思っているんですよ」

温故知新。変化を嘆くよりも、国際化や工業化も抵抗なく前向きに受け止めてきた屈託のないお人柄。そんな小野さんだからこそ、雅楽の文化的価値を向上させたと賞される偉業につながったのだろう。ほかの誰かではできなかったのだ。

（なお、小野功龍さんは本誌取材後の8月30日に逝去されました。）

おの こうりゅう　1936 年生まれ。1965 年龍谷大学文学研究科仏教学仏教史専攻博士課程単位取得満期退学。相愛大学学長、浄土真宗本願寺派仏教音楽儀礼研究所長などを歴任。現在、天王寺楽所雅亮会理事長・楽頭、相愛大学名誉教授。雅楽演奏に従事し、その継承と文化的価値を高めた功績で、2013 年瑞宝中綬章を受章。2013 年度日本芸術院賞、恩賜賞を受賞。

08 | People, Unlimited

龍谷人

淡路島の起爆剤 27歳の市議

洲本市議会議員

木戸 隆一郎さん

今年3月、淡路島洲本市に市政最年少議員が誕生した。本人が同級生や隣組をまわるところから始めた、まさに「草の根」の選挙活動の末、初出馬で得票数二位という結果で当選した木戸隆一郎氏、27歳。

洲本市の兼業農家出身、洲本市育ち。地元のために働くという幼い頃からの夢を追い続け、大学で京都に出て本学法学部政治学科に進学。トイレ・シャワー共同のアパートに暮らし、学費・生活費はバイトと奨学金で全てまかなった学生生活！政治学研究会代表、国会議員のインターン、学生秘書など、机上でも実践でも知識と経験を積み上げた。卒業後は、まずは民間の現場を知りたい、と淡路島に営業所がある一般企業に就職。そして2013年に退職し、時は今、と立ち上がった。当選後、任務に就き、議会も経験、新人として関連施設の視察やイベントに出席、市民の声に耳を傾ける日々だ。

「若手としての自分の役割は、地域の御用聞きだけではなく、大学で学んだ最新知識を応用したり、各地での興味深い企画を紹介しアレンジしていくような、提案型の政策活動の実行かなと。常にアンテナは高く保ちたいですね。これまでの人材とは違う部分での期待を感じていますので。だから全国各地に広がる学生時代の人脈からの情報は大切です」

何かあれば工場誘致と言った時代は変わった。今なら例えば中小の制作会社がオフィスを都市圏近隣の鎌倉や京都など環境の良い地に構え、それがきっかけで地域振興となる例も。近くの瀬戸内の島々は、近年アート分野で多様なプロジェクトが立ち上がり注目されている。活性化=都市化ではない。洲本の個性を掘り起こし、新しいアプローチの仕方を探りたいと木戸さんは考えている。

「人口増加を狙うのは、もう違うのかなと。とはいえ何もしなければ、単純計算で約70年後には人口はゼロです。減少は減少でも、コツコツと挑み続けバランスのいい人口形成にすべきと。私は『遅々として』という言葉、政治では大事だと思うんですよ。『確実に進む』という意味で。若さは感じられないかもしれませんが（笑）」

若い世代をどう掘り起こすかも木戸さんの課題。自分と考え方が違う人、要望がある若手は名乗りをあげてほしい。広報誌や市議会を見てほしい。自身の存在により、少しでも若い世代に地方自治への興味関心が浸透し、ひいては洲本の利益になれば理想だ。

「その先に、まちづくりについて各所から知識がわいてくるようになって、市から『予算があるからコレを』ではなく、市民のほうから『こんな取り組みをしているから、こういう予算の組み方をしてくれないか』という流れができると思うんですよね。例えば京都ではいろんな市民活動団体やNPOが、まちづくりで重要な役割を担っている。それに対して洲本市はまだ行政に頼っている部分が大きい。もっと、自分達のまちは自分達でつくり上げていくぞ、という土壌を醸成させるような予算組みをし、若い人達がそこにコミットできるような環境をつくって、そこからまた新しい取り組みが自然発生的に生まれてくることが、一番いい形だと思います。それが地方住民自治というか、私が望んでいることです」

つい尋ねてしまった、「木戸さんはどこまでいくつもりなんですか」と。国政をめざしたり？「よく言われます（笑）。いいえ、どこにも行きません。しっかり地元に軸足を置いて、やっていきます。私の望みは、洲本が、市民活動や経済や市政、様々な角度から、より活き活きした良い街になることです。のちのち、あの若い議員が出てきた頃からいい動きが出始めたな、と、そんな刺激の一つになれたらいいなと思っています」

一人の若い龍谷人が変えようとしている、淡路島・洲本市。これから注目だ。

きど りゅういちろう　1986 年洲本市生まれ。2009 年法学部政治学科卒業。在学中は富野暉一郎教授（元神奈川県逗子市長）の薫陶を受け、学びを故郷で活かしたいと決意。2009 年、淡路にも営業所がある機械工具卸の専門商社、株式会社スギモト入社。小野営業所、淡路営業所に配属。営業として製造業の現場をみる。2013 年 11 月、洲本の役に立ちたい、と退職し、木戸隆一郎事務所を設立。2014 年 3 月洲本市議会議員選挙に出馬、初当選。

08 | People, Unlimited

龍谷人

今日からはじめられる、『夢を実現する方法』教えます

ウエディングエプロンデザイナー

麻丘 亜希さん

初代ミス龍谷という名に相応しく、美しくすらりとした女性が現れた。リゾートホテル勤務を経て、2010年に起業し、自らデザインしたエプロンを販売するネットショップ、『ラナンアンドキュラス』を立ち上げた麻丘亜希さんだ。

生地をたっぷり使ったドレープが特徴のかわいらしいエプロンは、発売するとすぐに女性の心をつかむ。結婚式のケーキカットの際に新婦がドレスの上につける『ウェディング・エプロン』として人気を博し、有名女性誌にも紹介された。仕事のやり方はノートパソコン1台で、世界を自由に行き来するいわゆるノマド。今年8月には、同じくノマドの男性と結婚。新婚旅行は、1年間の計画だそうだ。

「旅をするように世界で自由に暮らしたい、というのが子どもの頃からの夢。外国に縁のない30歳を目前にした女子が、『いつかパリで暮らすの』なんて言い続けていたら、『現実を見て結婚したら』と誰もが言いたくなるでしょう。それでも私は、『いつか絶対叶うはず』と楽観的に思い続けていました」

もう一つの夢が、かわいい雑貨屋さんをひらきたい。これは、エプロンショップをつくることで叶ったが、誤算だったのは全く儲からなかったこと。とにかく“最高にかわいいものを作りたい”という気持ちだけで作ったエプロンは、縫製職人さんにまで「この製品作るの大変やで」と言われるほど手が込んでいて、気がつけば原価率が8割を超えていた。順調に人気も出て売れているのに、儲からない。しかも商品企画から顧客対応、発送まで全てを一人でしていたら、忙しさのあまり心身ともに疲弊。せっかく夢を叶えたのにボロボロに。

「これはなんか違うぞと思い、思いきってライフ・スタイルを、自分のしたいように変えてしまうことにしました。そのときに思い出したのが、『海外で暮らしたい』という長年の夢でした」

まず手はじめに、毎月1週間ずつ海外旅行に行こうと決め、LCCで4カ月先までのチケットを予約。そうすればもう行くしかない。そこで、最低限自分でしなくてはならない仕事以外は全て外注し、価格も上げることに。幸い、類似品がないことから競合がなく、やり方を変えても売り上げは変わらなかった。こうして念願のライフスタイルを始めたが、またしても問題が発生。

「一人で海外を訪れてはじめてわかったのですが、たった1週間でも見知らぬ土地に一人でいるのってものすごく寂しいんです。これはパートナーがいないとダメだ！と思いました」

そんな時に、偶然出会った方が今のご主人。同じようなライフ・スタイルと価値観を持った二人は意気投合し、半年で結婚。

「ノマド夫婦として、時間にも場所にも縛られずに生きていくことができるようになりました。経緯は行き当たりばったりでも、結果的に私の夢は叶っているんですよ。夢を叶えるためには、まず夢を見ないことにははじまらない。私は、毎年元旦に自分がしたいと思っていることを100個書き出す、“夢リスト”を作っています。『シンガポールのマリーナベイサンズのプールで読書をする』というように、できるだけ夢を具体的に書くのがコツ。できあがったら、それをスケジュール帳に書き込みます。つまり夢を予定にしてしまうのです。夢リストをいつも自分の行動指針にする。すると、これが不思議と叶っていくのです。誰でも人生がうまくいかない時ほど、自分の夢を諦めてしまいがち。でも、そんな時ほど、自分がウキウキした気分になれる夢を忘れてはいけないのです。夢を描けば気持ちも前向きになり、そこから少しずつ状況が良くなっていくはずですから。夢を叶えようとすることって、自分を大事にケアすること。これからも自分が輝いていられるような夢を持って、私らしい人生をつくっていきたいです」

常に前を向いて、次々と自分の夢を叶えていく麻丘さん。彼女の『新しい一歩』を着実に進めていく姿勢に、パワーをもらった気がする。

あさおか あき　1983 年茨木市生まれ。経営学部 2006 年卒業。上場企業のホテルにてフロント係として社会人スタート、優秀社員賞も獲得、3年後に退職。雑貨ビジネススクールで学び 2010 年 26 歳で雑貨ブランド「Ranun and Culus」を立ち上げる。第一弾はスワロフスキーで名前が入るデコエプロンを。未経験ながらデザイン、撮影、サイト構築など、企画から販売まで自らおこなう。SNS を駆使し、雑誌（JJ、maria）やメディアに取り上げられる。現在は「Ranun and Culus」の経営と並行して、独立支援やデザイナー、コンサルティングをおこなう。

09 | Book Cafe

新刊紹介

＊値段は全て税込価格で表示
＊Book Cafeについては龍谷大学学長室（広報）まで

01 出版助成

『国民文学のストラテジー
ープロレタリア文学運動批判の理路と隘路』
内藤 由直（文学部講師）著者

「国民文学」論は、〈政治と文学〉の対立を止揚する議論であり、ナショナリズムが高揚する時代のなかで、プロレタリア文学運動を再起動させる試みだった。本書は、「国民文学」が時代のなかで果たした役割を再検討しながら、プロレタリア文学運動に後続する革命文学の理論として構想された「国民文学」論の戦略を明らかにする。

2014年2月刊／253頁／双文社出版／3888円

02 出版助成

『21世紀のICT多国籍企業』
夏目 啓二（経営学部教授）著者

21世紀に入って日米欧先進国の多国籍企業、特に日本の多国籍企業の停滞と衰退が著しい。反面、新興国の多国籍企業、特に、中国、インドの多国籍企業の台頭が著しい。20世紀の多国籍企業の世界になかった事態である。本書は、電気・電子・エレクトロニクスを包括するICT産業を焦点に21世紀の世界の多国籍企業を解明している。

2014年2月刊／300頁／同文館出版／3240円

03 出版助成

『フレーベルにおける「予感」の研究
ー解釈学的・人間学的考察』
田岡 由美子（短期大学部教授）著者

本書は、幼稚園の創始者として有名なフレーベルの理論と実践を貫く最も根本的な特徴である「予感」（Ahnung）概念について、その内実と人間形成上の意味を明らかにしている。その際、「予感」を、従来の発達認識論の初発段階に位置づける解釈から解き放ち、日常のなかで生きて働く人間固有の総合的な直覚力として捉え直した点に本書の独自性がある。

2014年2月刊／152頁／高菅出版／3996円

01 共同研究活動

龍谷大学社会科学研究所叢書第99巻
『地方政府の効率性と電子政府』
西本 秀樹（経済学部教授）編著
西垣 泰幸（経済学部教授）共著

本書は、公共政策と情報政策の専門的立場から、地方政府の効率性と電子政府の新たな役割についてまとめたものである。複数の著者により理論と解説、実証的成果を平易に示すことを目標に構成されている。2部構成となっており、1部（第1章~第5章）では地方分権と公共政策の効率性について、2部（第6章~第9章）では電子政府推進とその政策的意義について述べられている。地方財政や電子政府政策の教科書としても最適な内容となるよう構成されている。

2014年3月刊／264頁／日本評論社／4536円

02 共同研究活動

龍谷大学社会科学研究所叢書第100巻
『町家と暮らし
ー伝統、快適性、低炭素社会の実現を目指してー』
増田 啓子（経済学部教授）・北川 秀樹（政策学部教授）共編著
井上 芳恵（政策学部准教授）共著

温暖化とヒートアイランド現象により、京都でもこの100年で平均気温が2.2℃上昇した。今後も上昇が懸念されるなか、夏向きの造りといわれる京町家を再度評価すべきではないか。本書は、伝統、快適（安全）性、低炭素をキーワードに、町家を中心とした木造住宅に焦点を当て、日本の気候風土に適した住居や暮らしを再考している。

2014年3月刊／246頁／晃洋書房／3240円

03 共同研究活動

龍谷大学社会科学研究所叢書第101巻
「無償教育の漸進的導入」と大学界改革
細川 孝（経営学部教授）編著
重本 直利（経営学部教授）共著

本書は社会科学研究所における共同研究「『無償教育の漸進的導入』と大学法人経営―日本の高等教育システム転換の課題―」の成果である。国際人権規約で謳われている「無償教育の漸進的導入」を日本において実現する展望とあわせ、（個別大学の改革にとどまるのではなく）大学界を改革していくための課題を論じている。

2014年3月刊／194頁／晃洋書房／2700円

04 共同研究活動

龍谷大学社会科学研究所叢書第102巻
『常態化する失業と労働・社会保障
ー危機下における法規制の課題』
脇田 滋・矢野 昌浩（法学部教授）共編
田中 明彦（社会学部教授） 共著

本書は、社会科学研究所の共同研究（2010年～2012年）「グローバル経済危機下における失業者の生活保障」の成果である。最近の日本社会では安定雇用が崩れ、失業や半失業が常態化してきた。EU諸国や韓国調査を踏まえた知見を基に、失業・半失業と労働・社会保障法の関連、若者、学生、障がいのある人の置かれている実態・問題を分析しつつ、人間らしい労働と生活を実現するための制度改革を提言する。

2014年3月刊／332頁／日本評論社／5940円

05 共同研究活動

龍谷大学社会科学研究所叢書第103巻
『老舗企業にみる100年の知恵
ー革新のメカニズムを探るー』
大西 謙（経営学部教授）編著

本書は、老舗企業7社の革新のメカニズムを、経営品質向上プログラムアセスメント基準の観点から検討したものである。ここで、革新のメカニズムは、企業が環境変化に対して革新をおこない、企業継続を果たしてきた手順や仕組みととらえている。各企業の何回かの革新期ごとに、革新がどのように起こったかを調査し、さらに、時代別と革新の要素別に7社共通の革新のメカニズムを探ろうと試みた。

2014年3月刊／240頁／晃洋書房／3240円

06 共同研究活動

地域ガバナンスシステム・シリーズNo.17
『東アジア中山間地域の内発的発展
ー日本・韓国・台湾の現場から』
清水 万由子（政策学部准教授）・大矢野 修（政策学部教授）・谷垣 岳人（政策学部講師）共著

本書のモティーフには、キャッチアップ型近代のあり方への問い直しが隠されている。中山間地域への着目は、都市・農村を問わず現代社会の深層にある「空洞化」の問題を考えることでもある。本書は「地域経済循環」「自治を支えるしくみ」「共同性の再構築」の視角から、東アジアの中山間地域の持続可能性に光をあてる。

2014年3月刊／125頁／公人の友社／1296円

07 共同研究活動

龍谷大学仏教文化研究叢書31
『戒律を知るための小辞典』
淺田 正博（元文学部教授）編

戒律用語をとりあげた日本で初めての辞典。ハンディでコンパクトながら掲載項目数は3198項目と充実。故・土橋秀高先生（元龍谷大学教授）のご遺稿に大幅な改訂をほどこし、東アジアに展開した戒律の歴史と思想の特徴を平易な言葉で解説する。はじめて戒律を学ぶ学生にぜひ手にとってほしい一冊。

2014年3月刊／404頁／永田文昌堂／5940円

08 共同研究活動

龍谷大学仏教文化研究叢書32
『対人援助をめぐる実践と考察』
吉川 悟（文学部教授）編

本書は、昨年度末にご退職された友久久雄名誉教授が、2008年から龍谷大学仏教文化研究所の共同研究グループでの研究者を中心とした論文集である。掲載した31論文は、仏教文化と臨床心理学という学際的研究で、「対人援助」という側面の共通性に則り、宗教と臨床心理の実践からの検討と、仏教文化領域の調査に基づく考察を中心としている。

2014年3月刊／362頁／ナカニシヤ出版／6372円

09 共同研究活動

龍谷大学国際社会文化研究所叢書16
『アフリカ・ドラッグ考
ー交錯する生産・取引・乱用・文化・統制ー』
落合 雄彦（法学部教授）編著

ドラッグという切り口からアフリカ社会への接近を試みた異色の書。コート・ジヴォワールにおけるレゲエ音楽と大麻、南アフリカのドラッグ問題の変容、エチオピアとケニアにおけるカート（噛むと覚せい作用をもたらす植物）の生産と流通、ガーナの薬剤の流通と乱用など、アフリカ諸国のドラッグ問題に関する8本の論考を収録する。

2014年5月刊／242頁／晃洋書房／3240円

01 みんなの本棚

『「沖縄シマ豆腐」物語』
林 真司（2002年大学院経済学研究科修士課程修了／ノンフィクション作家／大阪府）著者

第1回「潮アジア・太平洋ノンフィクション賞」受賞作。沖縄の伝統食材が語りかける　日本からアジアへ「人と食」をつなぐ旅。

2014年1月刊／222頁／潮出版社／1512円

02 みんなの本棚

『大谷光瑞の研究ーアジア広域における諸活動』
柴田 幹夫（1994年大学院文学研究科博士後期課程修了／新潟大学准教授／新潟県）著者

西本願寺22世大谷光瑞師の思想と行動を近代史のなかで考え、「本願寺の果たすべき役割を国家と社会との関わりのなかで熟考した人」と位置づけた。

2014年5月刊／382頁／勉誠出版／4860円

03 みんなの本棚

『体を使って心をおさめる 修験道入門』
田中 利典（1979年文学部仏教学科卒業／金峯山修験本宗宗務総長）著者

修験道の成り立ちや開祖・役行者の伝説とその教え、そして吉野修験に欠かせない大峯奥駈という大峯山脈を駈ける山修行についてわかりやすく解説。

2014年5月刊／224頁／集英社新書／740円

01:『防災教育のすすめ－災害事例から学ぶ－』
岩田 貢(法学部教授)編著

防災教育の一環として、日本各地で頻発する水害・地震災害などの自然災害について24の具体的事例を基に説明。社会科地理教育からの発信。
2013年11月刊／142頁／古今書院／3024円

02:『テレビ報道職のワークライフアンバランス』
松浦 さと子(政策学部教授)共著

テレビ局の現役報道職への詳細なインタビュー調査。「転職」「先輩との出会い」など16のライフイベントをキーワードに具体的な事例を探り、誕生60年のメディアにジャーナリズム性を問う。
2013年11月刊／256頁／大月書店／3024円

03:『小さなラジオ局とコミュニティの再生
－3.11から962日の記録』
松浦 さと子(政策学部教授)共著

東日本大震災被災地の「ラジオ」支援と調査をもとに、地域コミュニティの再生においてコミュニティラジオの果たすべき役割を問い直し、小さなメディアを支える社会的な仕組みについて提言をおこなう。
2014年5月刊／224頁／大隅書店／2376円

04:『抱っこで育つ「三つ子の魂」
－幸せな人生の始まりは、ほど良い育児から－』
金子 龍太郎(社会学部教授)著者

マイケル・ジャクソンも飯島愛も被虐待児で不幸な人生であった。ほど良い育児で育まれる健全な三つ子の魂は心の基盤で、人生の幸せに大きく影響する。
2014年6月刊／200頁／明石書店／1944円

05:『企業法務ガイド～判例活用編～』
今川 嘉文(法学部教授)著者

ビジネス法関連の裁判例300件を、事案の問題点、事実の概要、判決の要旨、企業法務の視点からの項目で解説。法的リスク管理の指針をめざす。
2014年5月刊／313頁／日本加除出版社／3888円

06:『脱原発の比較政治学』
高橋 進(法学部教授)共著

日独仏伊など各国で誰(どんな勢力)が原発(脱原発)政策を、どのように選択してきたのかを、政治学の視点から分析、各国比較をしている。
2014年5月刊／275頁／法政大学出版局／2916円

07:『Keynes and his Contemporaries:Tradition and Enterprise in the Cambridge School of Economics』
小峯 敦(経済学部教授)著者

ケインズの経済思想を、カリキュラム改訂・女性学位・大学自治という論題や同時代人との比較において、マーシャル的伝統からの革新と捉える試み。
2014年5月刊／168頁／Routledge／£80

08:『九鬼周造と輪廻のメタフィジックス』
伊藤 邦武(文学部教授)著者

九鬼周造の形而上学的時間論について、関係する東西の古典的テキストへの参照を交えつつ、そのメッセージを解明する。
2014年7月刊／250頁／ぷねうま舎／3456円

09:『歴代天皇125代総覧』
平林 章仁(文学部教授)共著

初代天皇神武から今日に至るまでの、歴代天皇125代の系譜・事績・事件・逸話などについてまとめた歴代天皇辞典。
2014年7月刊／429頁／KADOKAWA／1080円

10:『日本古代史人物辞典』
平林 章仁(文学部教授)共著

日本古代史を語るうえで欠くことのできない重要人物の出自・系譜・役職・事績などをまとめた古代人名辞典。
2014年2月刊／348頁／KADOKAWA／864円

11:『Novel Advances in Microsystems Technologies and their Applications』
木村 睦(理工学部教授)共著

マイクロシステム技術とその応用について書かれた書籍で、本著者はそのなかで、薄膜デバイス応用の第一人者として、最新の成果を記している。
2014年7月刊／621頁／CRC Press／£79.20

12:『18歳からはじめる民法(第2版)』
中田 邦博(法科大学院教授)共編著

民法の最新の入門書。近時の法改正及び民法改正の動向を踏まえて改訂。
2014年2月刊／110頁／法律文化社／2376円

13:『簿記－日商3級試験の解法』
井手 健二(経営学部准教授)共著

日商簿記検定3級の内容を紹介した基本テキストとその試験対策用問題集を兼ねた一冊。
2014年4月刊／248頁／学文社／1080円

14:『変容する親密圏／公共圏8　セクシュアリティの戦後史』
桑原 桃音(社会学部助手)共著

戦後の異性愛、同性愛に関するイメージの成立、マンガ・雑誌などのメディアにおける性の表象を考察しながら、セクシュアリティの形成を解明する。
2014年7月刊／358頁／京都大学学術出版会／4320円

15:『ベーシック条約集2014』
田中 則夫(法科大学院教授)編集代表

『基本条約・資料集』の全面改訂版として1997年に刊行されたベーシック条約集の最新年次版。303件の条約資料のほか国際法関係資料を掲載する。
2014年4月刊／1296頁／東信堂／1808円

16:『すぐできるアイデア食育
～指導案からパワーポイント教材、掲示板まで～』
内田 眞理子(短期大学部教授)共著

乳幼児期、学童期において食べることは喜びであり、学びである。「食育」を支える多様な学習指導案・教材を、京都食育キャラバン隊の実践から多数紹介した。
2014年3月刊／173頁／東山書房／2268円

龍谷 2014 No.78
Ryukoku Magazine 78 2014 September

広報誌「龍谷」からプレゼント！

龍谷ミュージアムペア招待券・・・・・・・・・・・・・・・10組20名様

ご希望の方は、はがきにご希望のプレゼント名を明記した上で、住所・氏名・年齢・職業・電話番号（龍谷大学関係者は卒業年度・学部なども）及び広報誌「龍谷」の感想・意見、あなたの近況などを書き添えてご応募ください。感想や近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。あて先は右記「プレゼント」係まで。

締め切りは12月12日（金）必着。
応募多数の場合は抽選で。当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。

広報誌『龍谷』78号　読者アンケートのお願い

今後のよりよい広報誌づくりのため、
同封のアンケートにて皆様のご意見をお聞かせください。

なお、アンケートは、
https://www.ryukoku.ac.jp/enquete/
からも回答していただけます。

お詫びと訂正

前号（77号）の文中に以下の誤りがございましたので、お詫びして訂正いたします。

・P19　井上あずきさん、藤川明絵さん出身高校名
　（誤）京都文京高等学校　→　（正）京都文教高等学校
・P29～31　各教員の学科下へ追加
　（就任予定）
・P30　山崎英恵先生の肩書き
　（誤）山崎英恵 教授 →　（正）山崎英恵 准教授

読者のひろば

息子が大学へ進学すると、学校と保護者の関わりが希薄になるだろうと思っていました。本誌が届くたび、息子の学生生活を感じられるので、嬉しく思っています。

（在学生保護者H）

建学の精神を伝える記事や、在学生のスポーツでの活躍など、幅広く取り上げられていて、内容が充実していると思います。

（1969年卒業生M）

77号で、「現場主義」「生き物を相手にしているという謙虚さ」「建学の精神に基づく倫理観」をもって、農学部の新設に向けた準備をされているという記事を読み、農学部教授陣に対して好印象をもちました。

（1991年卒業生）

愛校心を感じられる編集で、毎号楽しみにしています。

（1973年卒業生N）

77号の「龍谷の至宝『大宮学舎本館』」を読み、学生時代に回廊を走ったことを思い出し、懐かしく感じました。

（1973年卒業生N）

お便り待っています

「読者のひろば」へのお便りをお待ちしています。
また、「People, Unlimited：龍谷人」などへの推薦や情報をお寄せください。いずれも以下のあて先まで。

《プレゼント・お便りのあて先》
龍谷大学 学長室（広報）
〒612-8577　京都市伏見区深草塚本町67
電話：075（645）7882
FAX：075（645）8692
E-mail：kouhou@ad.ryukoku.ac.jp

編集委員　新井 潤、安食 真城、生駒 幸子、石田 義憲、石橋 良太、市川 良文、乾 真理、猪瀬 優理、岡本 健資、梶脇 裕二、カルロス マリア レイナルース、佐竹 康輔、芝原 正記、世雄 理博、高橋 正行、田中 順也、谷村 知佐子、中尾 覚、西倉 一喜、藤原 直仁、古澤 登美代、遊磨 正秀（50音順）
事 務 局　増田 滋彦、田中 秀樹、田中 正徳、神野 華奈子

広報誌「龍谷」78号
2014年9月12日発行

編　集：龍谷大学編集委員会
制　作：龍谷大学学長室（広報）
発　行：龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
電話　075（642）1111（代表）

龍谷大学ホームページURL
http://www.ryukoku.ac.jp

龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY